

## 京都府内出土の木製農耕具 — 弥生時代～古墳時代の鍬鋤類を中心として —

黒須 亜希子

### はじめに

本稿では、京都市内から出土した木製農耕具のうち鍬鋤類について検討を加える。

木製農耕具とは、農業に用いたと考えられる耕起具、収穫具、脱穀具およびその補助具を含む総称で、主な器種には、鍬・鋤・馬鍬・犁・木包丁・鎌・杵・臼・田下駄等がある。鍬・鋤は耕起具の一種であり、主に土の掘削や攪拌に用いられる。現代の道具と形状が似るため、早くから機能が特定されるとともに、弥生時代における稲作の是非を決定づける資料の一つとして認識されてきた。

近畿では、これまでに弥生時代～古墳時代の鍬・鋤類の分類と編年研究が行われており、一定の指標が示されている〔上原1993, 以下『木器集成』〕。近年では、旧国単位の細かい地域性に着目した報告がなされるようになり、隣接地域との比較研究を可能とする素地が整えられつつある〔青島2003〕〔黒須2008〕〔中川2002〕。ただし、この状況はこれまでに報告例が多い大阪府(河内・和泉)、兵庫県(播磨・摂津)、滋賀県(近江南部)等に限られており、京都府内の動向については、長く未整理の状況にあった。

令和元年12月、上記をふまえて企画された『第26回京都府埋蔵文化財研究集会』

では、「京都府内における木製農耕具」をテーマとして掲げ、府内の現状を把握することを目的とした発表が、各市町より行われた。その結果、山城、丹波、丹後における細かい地域性が明らかになるとともに、地域間の連動が確認された〔府埋研2019〕。特に、山城・丹波は、鍬鋤類において摂津との同調性が高いこと、また南山城は隣接する大和との親縁性が高いことがわかり、限られた資料数の中ではあったものの、一定の成果を得られた。

本稿では、この経緯により得られた情報を再整理した上で、改めて京都市内を含む山城地域の状況を他地域と比較し、その特徴を明らかとしたい。

### 1. 鍬と鋤の特徴

はじめに、本稿で用いる鍬・鋤の用語について整理しておきたい。分類項目は柄の形状、着柄方法、身と刃先の形状、刃幅の広さとする(図1)。

木製農耕具のうち、土を掘り起こす耕起具には、刃先を土に打ち込む「鍬」と、刃先を土に差し込む「鋤」の2種がある。前者は現在も使用されているクワとほぼ同形であり、後者はシャベル(スコップ)に似る。鍬は装着する柄の形状から、「直柄鍬」と「まがりえぐわ曲柄鍬」に分類される。直柄鍬は鍬身

に柄孔を設けて棒状の柄を差し込んで使用する鋤の総称である。直柄鋤には、柄孔を身の上半部に設ける通有の鋤と、身の中央に設ける「両刃鋤<sup>1)</sup>」がある。

通有の鋤には、刃先の先端を直状に作る平鋤と、叉状に作る又鋤があり、特に三又以上に作るものを「直柄多又鋤」と呼び分ける。また、平鋤の中には刃幅が全長よりも広く横木取りで製作するものがあり、これを「横鋤」と称する。

平鋤のうち、『木器集成』では刃幅が15cm以上のものを「<sup>ひろくわ</sup>広鋤」、以下のものを「<sup>さくわ</sup>狭鋤」と呼称する。本稿でもこれに従い、直柄鋤を大きく「両刃鋤」「狭鋤」「広鋤」「直柄多又鋤」「横鋤」の5種に分類する(図2)。このうち、狭鋤は土に刃を打ち込む打ち鋤であり、広鋤と横鋤は土を引く引き鋤である。

## (1) 直柄鋤 (図5)

### 1) 両刃鋤

両刃鋤は、鋤身の上下に刃を持つ鋤で、他の鋤より大型で重量がある。平面形状により、両刃鋤1式(平面長円形)、両刃鋤2式(平面撥形)、両刃鋤3式(平面方形～台形)の3種を設定する。近畿で出土例があるのは現時点では1式のみである。

### 2) 狭鋤

#### 狭鋤1式(縄文型鋤・鋤状木製品)

弥生時代の直柄鋤が柁目材で作られるのに対し、小径木の板目材を用いることを特徴とする。このため、木目に沿って湾曲するものが多い。出土例は少ないが、弥生時代以後の鋤には連続しない形態であることから、鋤状木製品の名で呼称されることもある〔中原2003〕。現時点での出土は四国の一部地域に限られている。

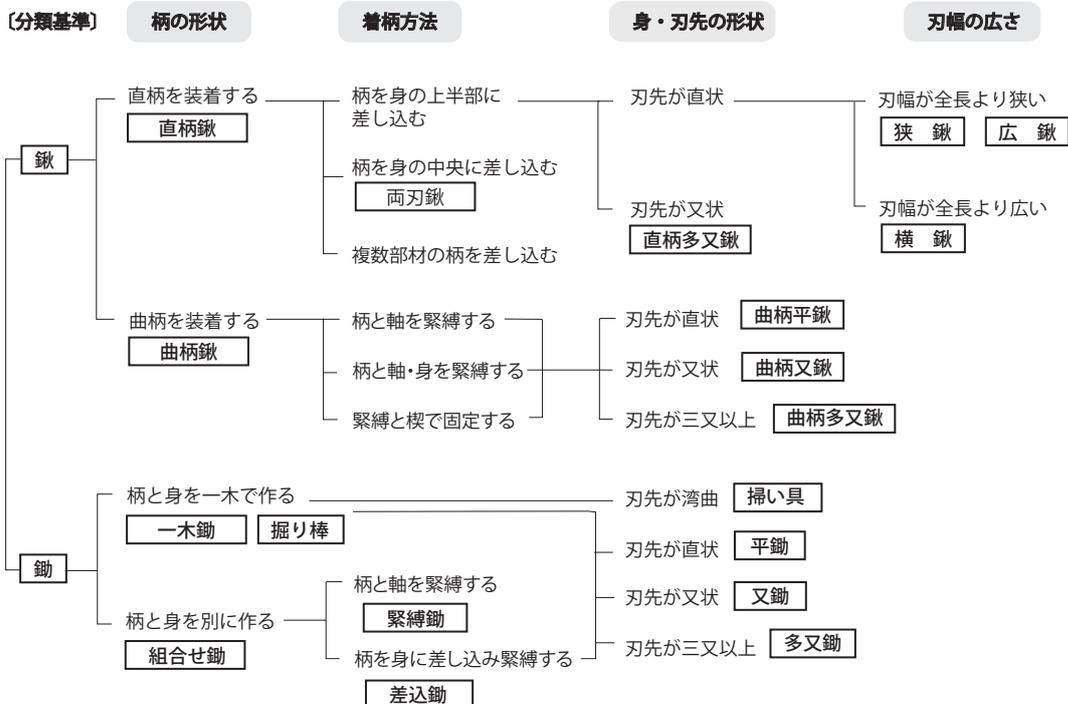


図1 鋤と鋤の分類基準

### 狭鋤 2 式

平面形状が長方形，隅丸方形もしくは楕円形で，鋤身上半部に柄孔をもつ鋤を指す。柄孔隆起が段をもって突出するものを 2 a 式，緩やかに隆起し，やや厚みが増す程度のものを 2 b 式とする。着柄孔の角度には統一性がなく，鈍角に装着されるものも存在する。後述する近畿型鋤 2 式の転用品であることが多い。

### 狭鋤 3 式

狭鋤のうち，特に刃幅を細く作る類である。柄孔隆起をもつものを狭鋤 3 a 式，もたないものを狭鋤 3 b 式とする。後述する近畿型鋤 1 B 式・3 式・5 式を転用して作られる。

### 狭鋤 4 式

小型で円形もしくは三角形の頭部をもつ類で，柄孔隆起を持つものを狭鋤 4 a 類，もたないものを狭鋤 4 b 類とする。刃幅の小ささから狭鋤に類されているが，形状からは引き鋤としての用途が考えられる。出土例は少ない。

### 狭鋤 5 式（北九州型狭鋤）

平面形状は，頭部の二角を切り欠いた台形または三角形を呈する。柄孔は方形で，柄孔隆起はない。北部九州，東部九州，朝鮮半島に早い出土例がある。

柄孔が方形を呈するのは，差し込んだ柄の先端部を方形にカットし，同じく角材である補助具を差し込んで固定するという特異な装着方法を用いるためである。円形柄孔に比べて身のズレが格段に小さいという利点がある。

### 狭鋤 6 式（風呂鋤）

鉄製刃先を装着することを前提とした鋤

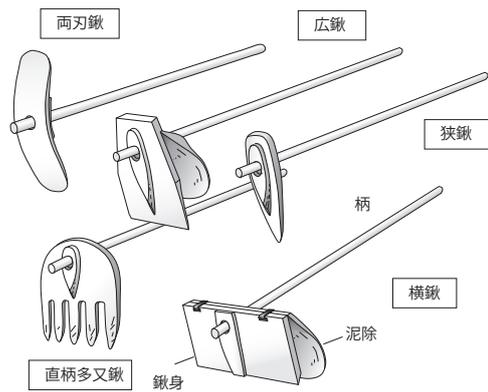


図 2 直柄鋤各種模式図

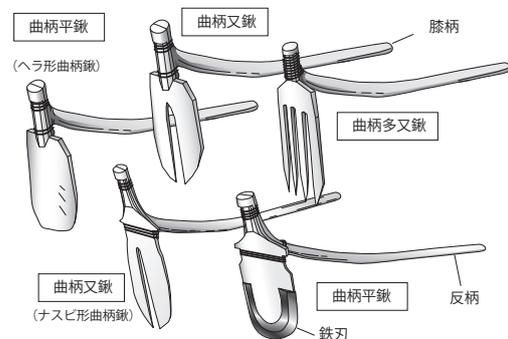


図 3 曲柄鋤各種模式図



図 4 鋤類模式図

で、「風呂鍬」と呼ばれる。上辺は両角を落とした平鍬で、刃先を丸く作る。柄孔は方形で大きく、柄孔隆起はない。柄孔が方形を呈するのは、北九州型鍬と同じく楔構造をもつ柄を差し込むためである。5世紀の佐賀県赤司遺跡に祖型と解される出土例がある。古代以後、鍬はすべてこの形に集約される。

### 3) 広鍬

全国的に一定の出土数がある広鍬は、各地域の名を冠して「地名+型」で呼称されることが多い〔樋上2008等〕。本稿でもこの動向に倣い、地域型として「近畿型鍬」「瀬戸内型鍬」「山陰型鍬」「北陸型鍬」「北九州型鍬」の5型式を設定し、細分する。

#### 近畿型鍬1式

身部中央よりも上位面が緩やかにくびれる広鍬を近畿型鍬1式・近畿型鍬1A式・近畿型鍬1B式に細分する。

近畿型鍬1式は、舟形もしくは滴形の柄孔隆起をもち、左右側辺に段や小さな突起を有する。断面形状は反りをもたない板状で、この点が後述する近畿型鍬1A式と大きく異なる。近畿型鍬1A式・近畿型鍬1B式は、ともに近畿型鍬1式を祖形とする。

近畿型鍬1A式は、柄孔隆起の左右に三角形孔を設け、側面に段や突起、浅い挟りをもつものが多い。柄孔隆起は舟形を呈する。近畿型鍬1式の断面に反りを加えた形態である。

近畿型鍬1B式は断面に反りをもたない板状品で、上辺中央に挟りを入れて両角を強調する形状をもつ。柄孔隆起は逆滴形

で、長く伸びる傾向にある。

#### 近畿型鍬2式

平面方形、台形、楕円形等を呈する板状品で、柄孔隆起が突出するものを2A式、しないものを2B式とする。また、平面凸形を呈するものを2C式とする。いずれも泥除装着装置は持たない。

刃幅15cmを目安として広鍬の類に加え、折損や使い減りにより刃幅が細くなると、狭鍬として使用される。

#### 近畿型鍬3式

鍬身前面に段をもつ一群である。ここでは平面形状が台形のを近畿型鍬3A式、側面に紐がかりをもつものを近畿型鍬3B式とする。この2種は長くのびた水滴型の柄孔隆起をもつ。

泥除は、前面の段の下に差し入れて装着した後、紐等で緊縛したと考えられる。側面の挟りや突起は、紐緊縛によって装着をより強固にするためのものであろう。

#### 近畿型鍬4式

平面形状が三角形に近く、両側辺に突起をもつ類である。柄孔隆起は逆滴形を呈する。断面形状は扁平で、反りや段をもたないことから、両側面の突起に紐をかけて緊縛し、泥除を装着したと考えられる。

#### 近畿型鍬5式

前面に蟻溝を設えた鍬である。『木器集成』では蟻溝をもつ一群を平面形状によりV～VII式に細分するが、本節ではすべて同型式とする<sup>2)</sup>。蟻溝には、蟻ほぞを削り出した泥除3式を横から差し込んで装着する。蟻溝を切るためには鍬身に一定の幅が必要であるため、鍬身の頭部は長方形か台形、逆台形となる。

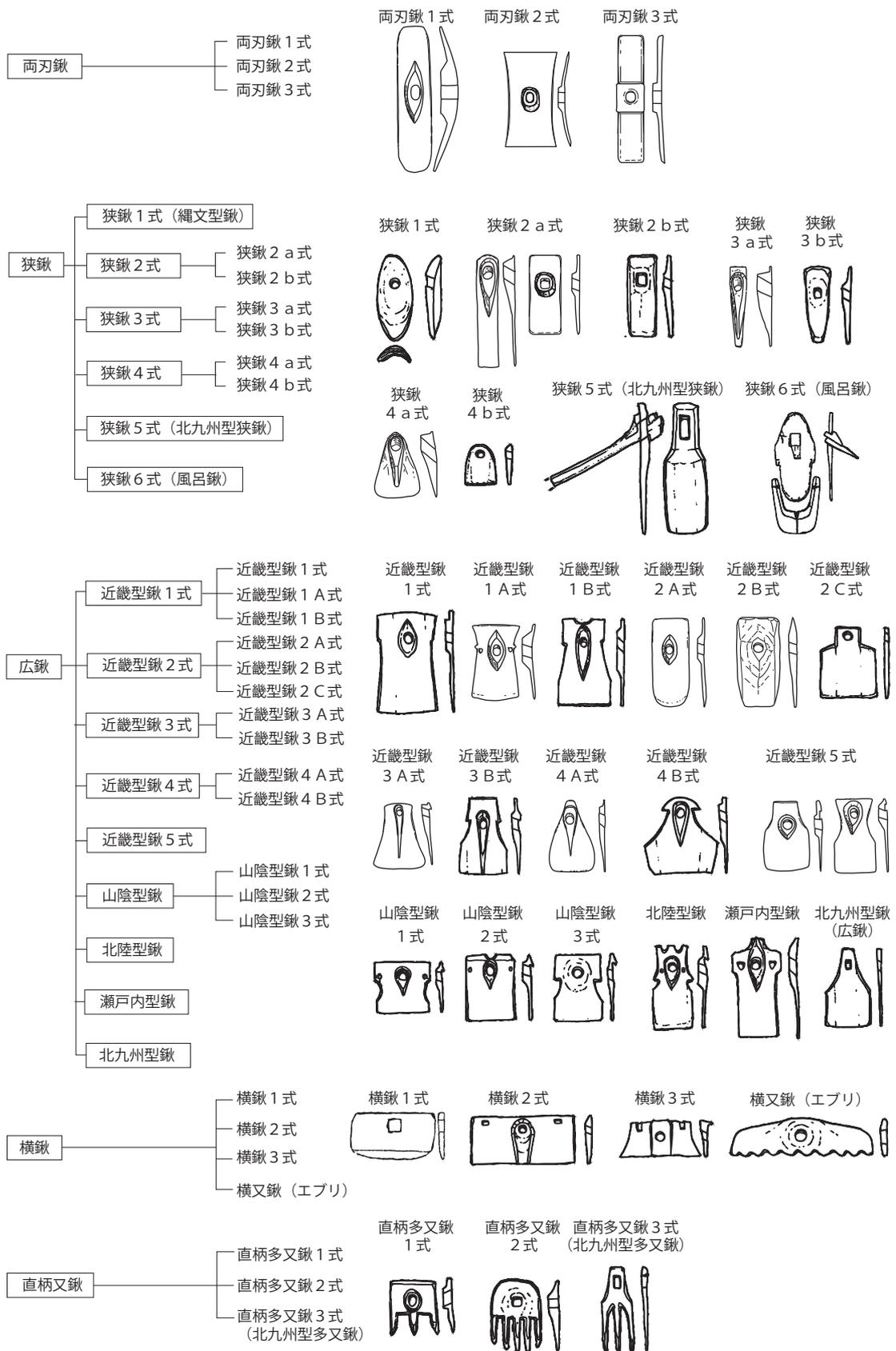


図5 直柄鋤の詳細分類案

#### 山陰型鍬 1 式・2 式・3 式

弥生時代の山陰を中心として出土する広鍬で、前面に鋭利な段を設ける点に特徴がある。頭部が直線状のものを山陰型鍬 1 式、中央に切り欠きをもつものを山陰型鍬 2 式、側面に切り欠きをもつものを山陰型鍬 3 式とする。1・2 式は島根県内、3 式は鳥取県内に出土例が多い。

#### 北陸型鍬

弥生時代中期後半以後の北陸で出土する器種で、柄孔の左右に円形もしくは方形の小孔を有する。この孔に楔を打ち込み、泥除を固定する。平面形状は、頭を丸く作るもののほか、波形または山形、肩部を突出させるもの等がある。

#### 瀬戸内型鍬

弥生時代前期新段階～中期の四国・瀬戸内に出土例がある器種で、舟形もしくは紡錘形の柄孔隆起を長く作り、上辺中央を突出させる形態をとる。近畿型鍬 1 式が祖型であると考えられる。

#### 北九州型広鍬

前述した北九州型狭鍬と同じ柄の形態を差し込む広鍬で、前面に泥除を装着する。平面形状は台形、柄孔隆起は作り出さず、板状を呈する。柄孔は方形である。

#### 4) 横鍬 1 式・2 式・3 式・横又鍬

平面形状は横長で、横方向に木目が通る鍬である。平滑な刃をもつ平鍬と、刃を浅く鋸歯状に切り込む又鍬がある。横又鍬はエブリとも称される。

平鍬は泥除装着形態によって細分し、泥除を装着しないものを横鍬 1 式、上辺に 2 孔を開けて泥除を緊縛装着するものを横鍬

2 式、さらに上辺に突起を持つものを横鍬 3 式とする。横鍬 1 式は弥生時代のうちに出現するが、幅が狭く小型である。

#### 5) 直柄多又鍬

刃を又状に切り込んだ多又鍬には、頭部を方形にする直柄多又鍬 1 式と円形にする直柄多又鍬 2 式がある。1 式は、3～4 本の刃を備えており、朝鮮半島や北西九州に早い出土例がある。1 式・2 式ともに柄孔隆起をもつものが古く、時代が下がるにつれて隆起を失う傾向にある。柄孔は、円形、方形の 2 種がある。また、側面に段をもつもの、細かい抉りをもつもの、柄孔の左右に小孔をもつものなど、細かいバリエーションがある。

このほか、北九州型狭鍬の刃先を又状に加工した鍬を直柄多又鍬 3 式とする。

#### 6) 泥除 (図 6)

##### 泥除 1 式 (1 A 式・1 B 式)

泥除は直柄鍬に装着して使用する付属品である。このうち笠形でその頂部に柄孔を有するものを泥除 1 式とする。

頂部が泥除のほぼ中央にあり、柄孔をその頂部ないしこれよりやや下がった位置に設けるものを泥除 1 A 式、突出部と柄孔が泥除の上半にあるものを 1 B 式と細分する。

##### 泥除 2 式 (2 A 式・2 B 式)

上辺に 2 孔を穿つものを泥除 2 式とし、同じく 2 孔をもつ鍬との装着を想定する。本稿では、横長のを泥除 2 A 式、円形に近いものを泥除 2 B 式と細分し、前者は横鍬用、後者は広鍬用と考える。

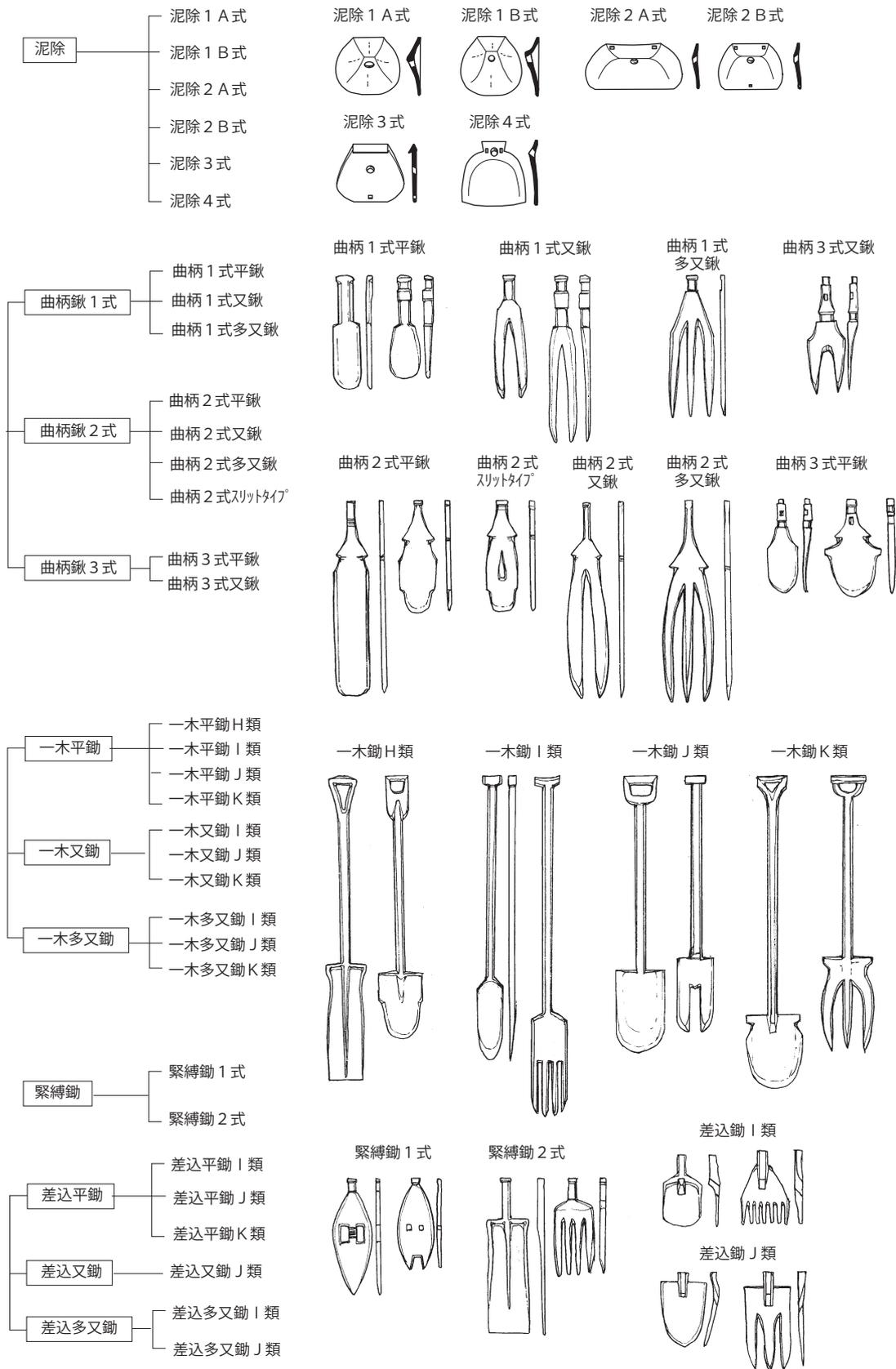


図 6 泥除・曲柄鋤・鋤の詳細分類案

### 泥除3式

上辺に蟻ほぞを作る一群である。平面形状は下ぶくれ気味の不正円形で、中央よりやや上方に柄孔を穿つ。蟻ほぞ以外の部分は板状を呈する。下辺に小孔を設ける例が多い。基本的に近畿型鋤5式に装着される泥除であり、横長のものは存在しない。近畿型鋤5式に差し込まれたまま出土する例もある。

### 泥除4式

板材の上部を方形に細く作る特異な形状をもつ。柄孔は上位中央にあり、左右に小孔を穿つ。主に北陸型鋤に装着される泥除で、小孔に楔を打ち込み、鋤と固定する。

## (2) 曲柄鋤 (図3・6)

曲柄鋤は、柄との装着方法による細分が可能である。先学による平面形状に基づくグルーピング〔町田1981〕と合わせて、以下の3種に分類する。

### 1) 曲柄鋤1式

鋤身の軸と柄を緊縛によって装着する一群で、平面形状はヘラ形もしくはスプーン形を呈する。町田分類の膝柄鋤A、『木器集成』の曲柄鋤Cに相当する。鋤身は楕円形ないしは下膨れ形の不整円形で、上方へのびる軸を持つ。身の肩が張るものとなで肩のものが認められ、前者には軸と肩の境界に明確な段をもつものがある。軸は板状に作るものや、断面半円形に加工するものがあり、先端に紐掛かりのための切欠きや溝を備える。ここでは、刃先の形状により平鋤を曲柄1式平鋤、二又鋤を曲柄1式又鋤、三又以上のものを曲柄1式多又鋤と称

する。そのルーツは明らかではないが、石鋤から派生したとする説やその祖形を縄文時代のヘラ状木製品に求めるもの等がある〔樋上2010〕。

### 2) 曲柄鋤2式

軸と鋤身と柄の3点を緊縛する一群で、平面形状がヘタを被ったナスビに似る。早くはナスビ形木製品と称され、用途不明品に類されていたが、静岡県宮塚遺跡で着柄状態の出土例が発見されたことから、その用途が明らかとなった。曲柄鋤1式よりもその固定強度を高めたもので、柄は時代が下がるにつれて膝柄から反柄へと変化する〔『木器集成』〕。反柄には突起や線刻が設けられ、曲面での紐掛りとなる。『木器集成』では、身の形態によりさらに細分化が図られているが、本節では上記と同じく、曲柄2式平鋤、曲柄2式又鋤、曲柄2式多又鋤と分類する。また、鋤身中央にスリットが入ったものを曲柄2式スリットタイプと呼称する。

曲柄鋤2式のルーツは弥生時代中期中葉の瀬戸内地域にあり、曲柄鋤1式の軸部が発展したものと考察されている〔樋上2000〕。

### 3) 曲柄鋤3式

曲柄鋤のうち、鋤身の上半部にほぞ孔を設けるものを曲柄鋤3式とする。柄、軸、身の緊縛に加えて、楔の打ち込みにより柄と身の更なる固定強化を図る形態である。柄と身に貫通孔（もしくはどちらかに未貫通孔）があり、この孔に楔を打ち込んで両者を固定する。上述に倣い、平鋤を曲柄3

式平鋤，又鋤を曲柄3式又鋤とするが，又鋤の出土は極めて少なく，多くが鉄製U字形刃先を装着する平鋤である。平面形状はナスビ形が多いが，ヘラ形を呈するものもある。柄は反柄で頭部を大きく作る。

### (3) 鋤 (図4・6)

#### 1) 一木鋤

一木鋤は，鋤身の形状により詳細分類を行う。『木器集成』では鋤身の形の形状に着目し，なで肩，丸肩，角肩等の名称を付している。本節でも肩の形状を重視し，大きく4種(H～K類)に分類する。すなわち肩に縁をめぐらせる形状のものをH類，なで肩のものをI類，角肩のもの全般をJ類，肩に突起をもつものをK類，上面と鋤身の中央にT字形に厚く作るものをT類とする。これを一木平鋤，一木又鋤，一木多又鋤すべてに適用し，「一木平鋤H類」，「一木多又鋤K類」等のように呼称する。

なお，一木又鋤，一木多又鋤のH類は存在しない。また，掘り棒は一木平鋤I類に含まれる。

#### 2) 組合せ鋤 (緊縛鋤・差込鋤)

組合せ鋤には，紐や樹皮により柄と鋤身を緊縛する「緊縛鋤」と，身に貫通孔ないし未貫通孔を設けて柄を差し込んだ後に緊縛する「差込鋤」の二者がある。緊縛鋤は，その方法で1式と2式を設定する。

緊縛鋤1式は，従来「木の葉形木製品」と呼称されたもので，楕円形の鋤身の上辺に軸をもち，身の中央に2点1対の孔を設ける。この孔の間に柄を置き，軸と鋤身の孔の2箇所を柄を緊縛して鋤状とする<sup>3)</sup>。

緊縛鋤2類は，鋤身の軸と柄のみを緊縛するタイプで，多又鋤に多い。

差込鋤には，一木鋤の類型を当てはめて，「差込平鋤J類」「差込又鋤J類」等のように呼称する。現在のところ，差込鋤はI，J，K類に限られる。全体的に平鋤が多く，又鋤，多又鋤の出土は少ない。

## 2. 京都市内の出土状況

### (1) 京都市内の出土例

次に，京都市内の出土例を示す。現在，木製農耕具の出土が報告されている遺跡は20か所程度であり，その多くが湿潤な沖積低地である市域南半部(南区・伏見区)に集中する(図7)。しかし，近年では平安京下層に展開する弥生時代～古墳時代の集落内から出土が報告されるなど，その範囲

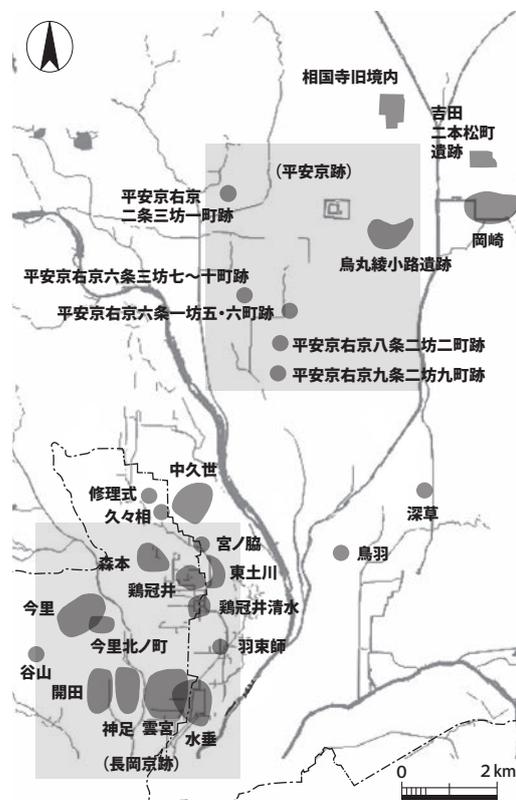


図7 京都市・近隣市町の鋤鋤類出土遺跡

は広がっている。また、鉄製刃先など、木質部分が失われていても農具の存在を示す資料も増加しており、他地域との比較に耐えうる資料数が集まりつつある。

### 1) 深草遺跡 (図8)

京都市伏見区西浦町に広がる縄文時代～古墳時代の複合遺跡である。北東に位置する東山丘陵から南西に向かって緩やかに下がる傾斜地に立地する。1966年に行われた京都府教育委員会の調査において旧流路が検出され、弥生時代中期初頭の土器とともに木製農耕具が出土した。

1は、近畿型鋤1B式の未成品である。板状に加工した鋤身の中央に長く伸びた逆滴形の柄孔隆起を作る。上辺の両角は欠損する。鋤身の最大幅は17cm程度と広鋤としてはやや狭い。このサイズの類例は大阪府高宮八丁遺跡(弥生時代前期末～中期初頭)にあり、上辺中央にえぐりをもつ。1はまだこの抉りが施されていない段階の未成品と解される。

2は泥除1B式の破損品である。身の上半部が盛り上がり、その最頂部付近に柄孔を設ける。

### 2) 鳥羽遺跡 (図9)

鴨川と桂川に挟まれた低地に位置する。広大な苑池をもつ鳥羽離宮(平安時代末～鎌倉時代)の下層にあたり、地下水位が高く湿潤な土地である。調査地点付近では、これまでに弥生時代中期～古墳時代の竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑等が確認されている。鋤鋤類は1981年に財団法人京都市埋蔵文化財研究所(以下、埋文研)が

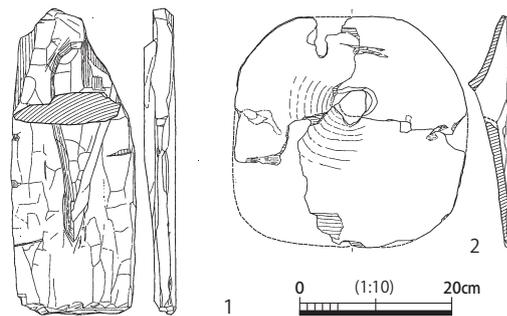
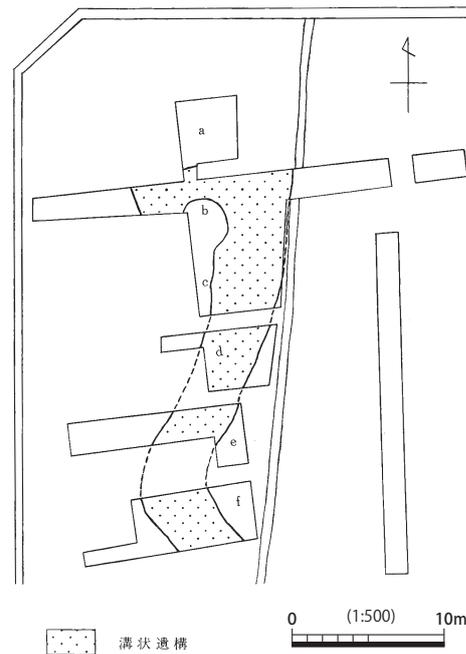


図8 深草遺跡

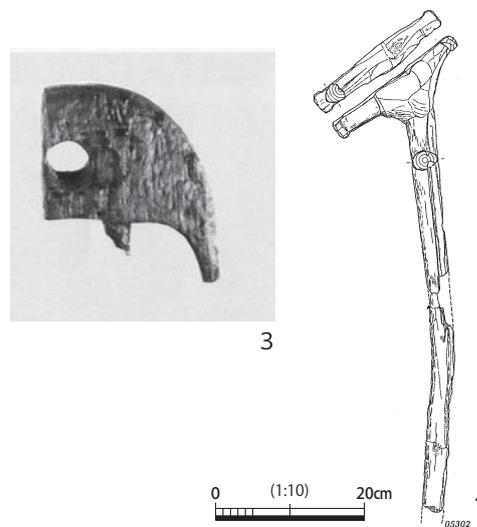


図9 鳥羽遺跡

行った調査において、溝SD3005より出土した。

3は直柄多又鋤2式で、円頭と4本刃に復元できる。柄孔は楕円形を呈し、周囲に欠損が認められる。柄孔隆起は存在しない。4は、曲柄鋤の柄である。握部の先端を欠損するが、鋤身を装着する台部は完存する。いわゆる膝柄で、台の両端を有頭状に削り出して紐掛かりを作る。柄は直状にのびた後、握部付近でやや湾曲する。弥生

時代中期後半と報告されていることから、組み合う鋤身は曲柄1式と推測される。用材はサカキである。

### 3) 中久世遺跡1 (図10)

桂川右岸の自然堤防上に立地する集落遺跡で、縄文時代から室町時代までの遺構が重複する。調査は複数回行われており、これまで2件の調査において木製鋤鋤類が出土している。

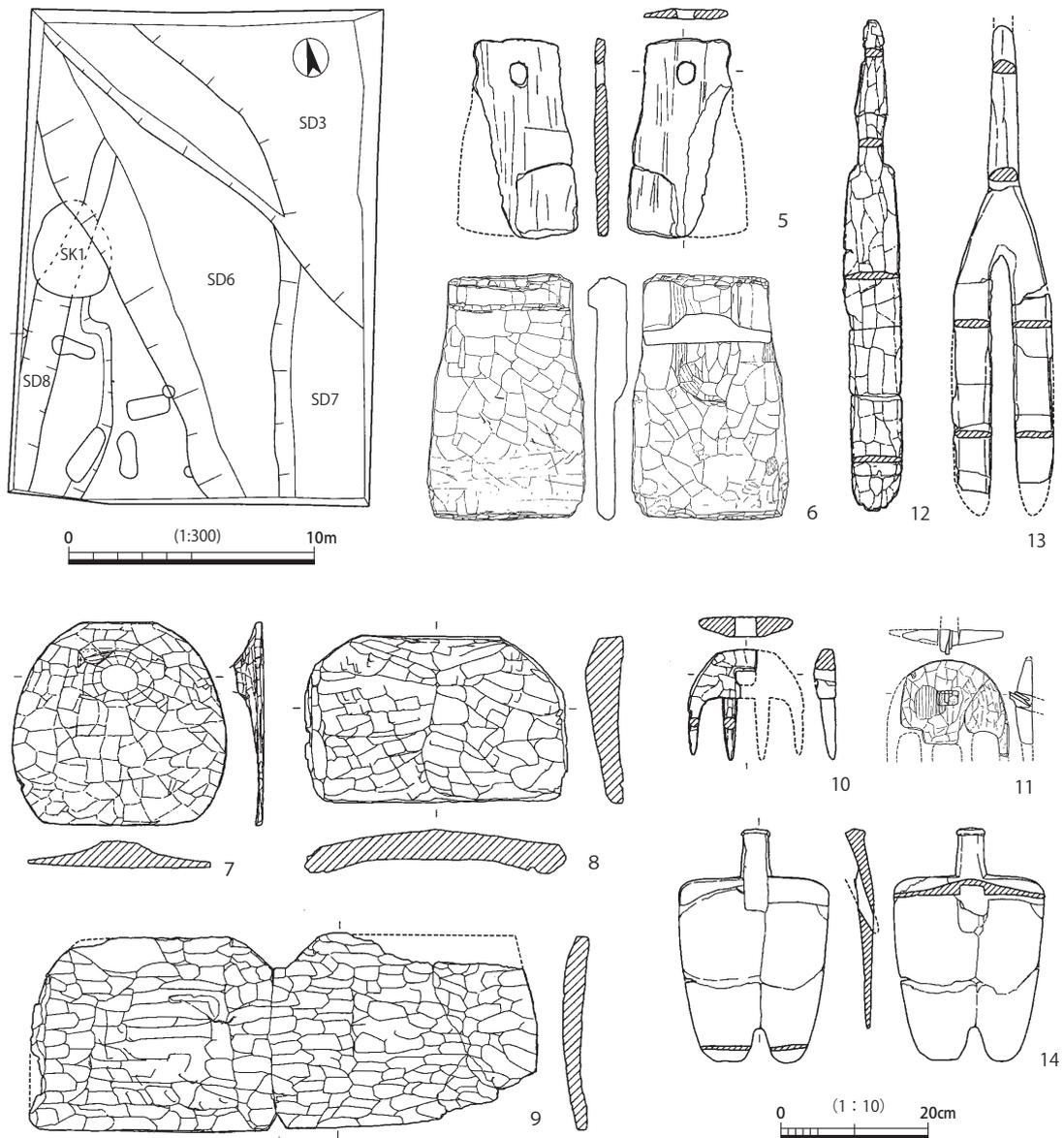


図10 中久世遺跡1

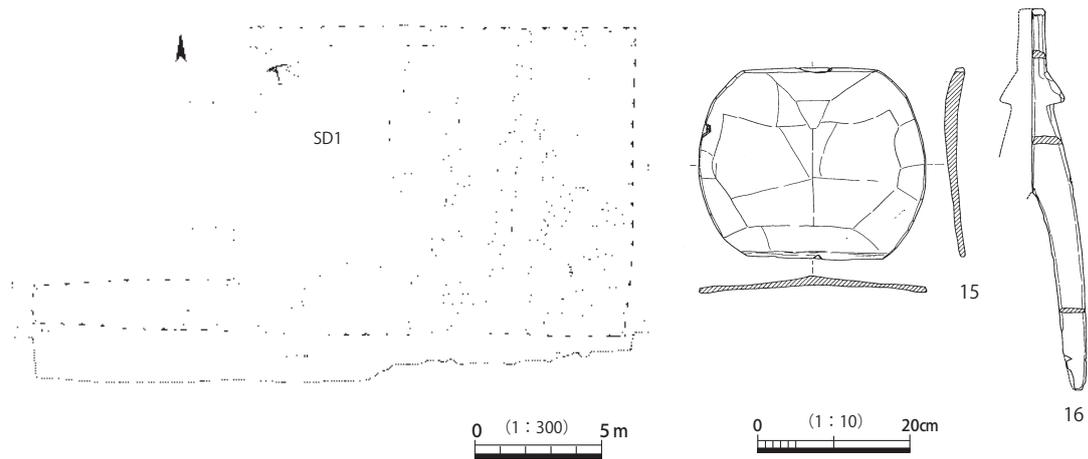


図 11 中久世遺跡 2

1977年に埋文研が国道171号と西国街道の交差点付近で行った調査では、弥生時代中期の流路、溝、土坑、ピットが確認された。このうち木製品は、流路（SD3・6・7）と土坑（SK1）、溝（SD8）から出土している。

5は近畿型鋤2C式で、柄孔隆起、泥除装着装置は認められない。6は近畿型鋤3A式の未成品で、前面に泥除装着用段、背面に逆滴形の柄孔隆起を設ける。7～9は泥除1B式の未成品で、低い頂部が泥除の上半部にある。9は2個体が連結した状態である。製作工程を復元できる好例であり、9→8→7の順に加工される。8は幅広であるが、この段階ではまだ横鋤が出現していないことから、さらに側縁を削り込んで広鋤用に加工するものと推測される。

10・11は直柄多又鋤の破損品で、4本刃に復元できる。柄孔形状はともに方形で、柄孔隆起は持たず厚みを持たせる。11は柄が差し込まれた状態で出土しており、先端に楔を打ち込んで柄の脱落を防止している。

12・13は曲柄鋤1式の平鋤と又鋤である。12の鋤身は細く7cmを測る。軸部の先

と根本を細く加工することから、鳥羽遺跡4のような柄に装着するタイプである。13は刃先と軸部の先を折損する。

14は差込鋤で、肩部に柄を差し込む方形孔を設ける。軸部の先端に短い紐掛かりを作り、差し込んだ柄と緊縛して固定する。柄孔は鋤身を斜めに穿つため、完成形態は刃先が屈曲した鋤となる。刃先は二又に分かれるが、土等を掬う道具とみてよいだろう。

#### 4) 中久世遺跡 2 (図11)

調査地は1987年にJR東海道線より西側で埋文研が調査を実施した。弥生時代～古墳時代後期の溝、土坑、ピット等が検出され、木製品は主に弥生時代～古墳時代初頭の溝（SD1）から出土した。SD1には新旧2時期があり、その埋土は下層（SD1-A層＝弥生時代中期後半）と上層（SD1-B層＝弥生時代後期）に大別される。

15は下層から出土した泥除の未成品である。柄孔隆起がほとんど認められないものの頂部が上半部にあることから泥除1B式と判断される。両縁は弧状、上下辺は直状に加工する。整形を終え、柄孔を穿つ前

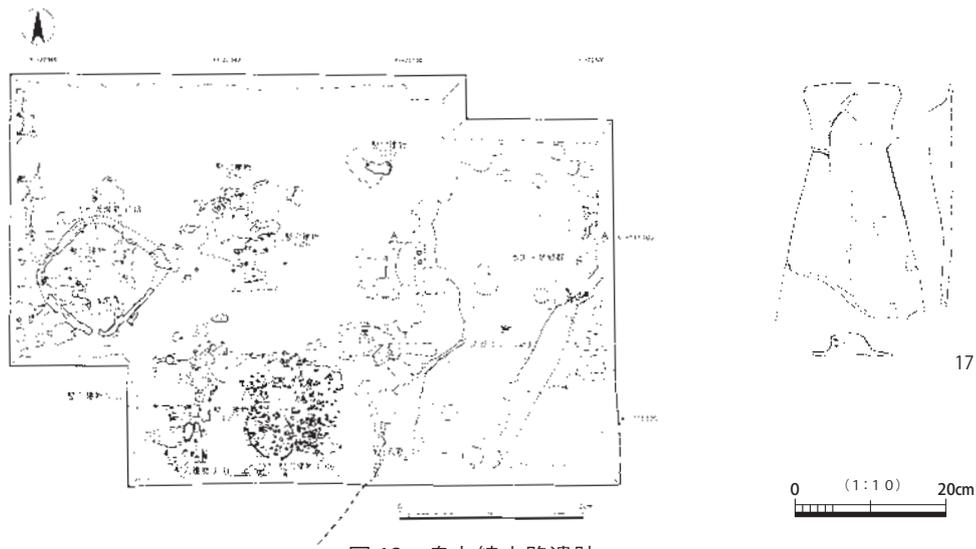


図12 烏丸綾小路遺跡

段階のものである。

16は、曲柄又鋤2式で、左半部を欠損する。先端に使い減りが認められる。

#### 5) 烏丸綾小路遺跡 (図12)

2018～2019年に、旧醒泉小学校内において埋文研が実施した調査である。平安京跡の下層遺跡であり、弥生時代～古墳時代の集落である烏丸綾小路遺跡の南端に相当する。北東から南西へ流れる自然流路とその右岸に営まれた竪穴建物8棟(弥生時代前期末～中期前半)、方形周溝墓(中期後半)等が検出された。

木製農耕具は、自然流路から斧柄等とともに出土している。17は、近畿型鋤3式の未成品である。平面形状は台形に近く、両側縁にくびれをもつ。柄孔隆起は上部がやや尖った長逆滴形で、この型式では古相を示す。側縁には段があり、図示はされていないがこれとほぼ同じ位置の前面に低い段が設けられている。泥除装着のための段と見られるが、非常に低い目印程度の加工である。

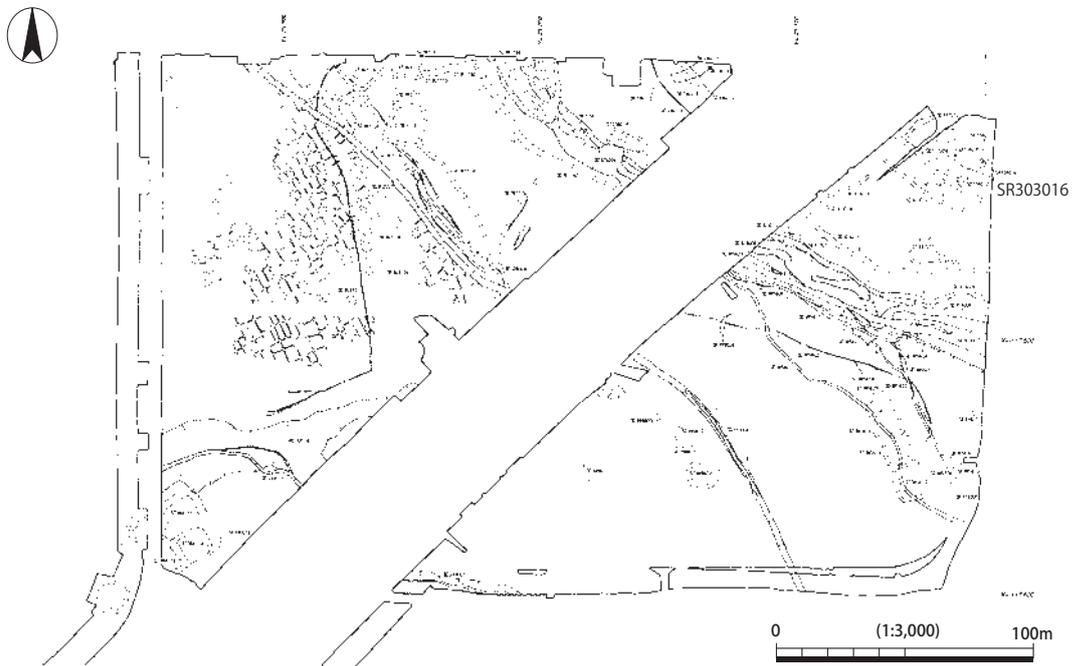
#### 6) 東土川遺跡 (図13・14)

桂川右岸に形成された沖積地と微高地上に立地する弥生時代の集落遺跡で、長岡京跡の下層に存在する。

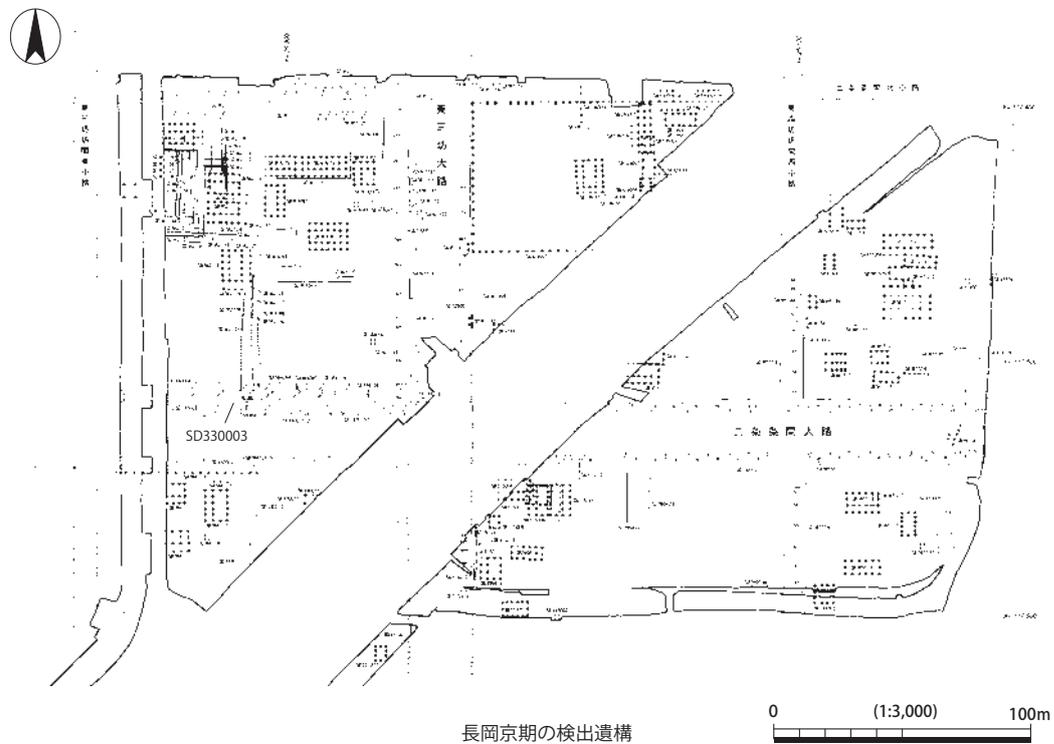
木製農耕具は、1993～1997年度に(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した、名神高速道路桂川パーキングエリア建設に先立つ調査において出土した。調査では、長岡京期の遺構面のほか、流路と水田、方形周溝墓群、溝等を有する弥生時代中期後半～後期の検出された。このうち木製品は、SR303016(流路もしくは湿地状遺構)より出土している。全体的に未成品が少なく、破損品が多い。

18～23は、近畿型鋤3B式の破損品である。平面形状は台形で、左右に小さく突起を設ける。前面には泥除装着用の段を有するが、その削り込み角度は鋭い。柄孔隆起は長くのびた逆滴形である。

24～27は、狭鋤2b式である。平面形状は楕円形ないし隅丸方形を呈する。突出した柄孔隆起はなく、柄孔周辺がわずかに



奈良時代以前の検出遺構



長岡京期の検出遺構

図 13 東土川遺跡・長岡京跡

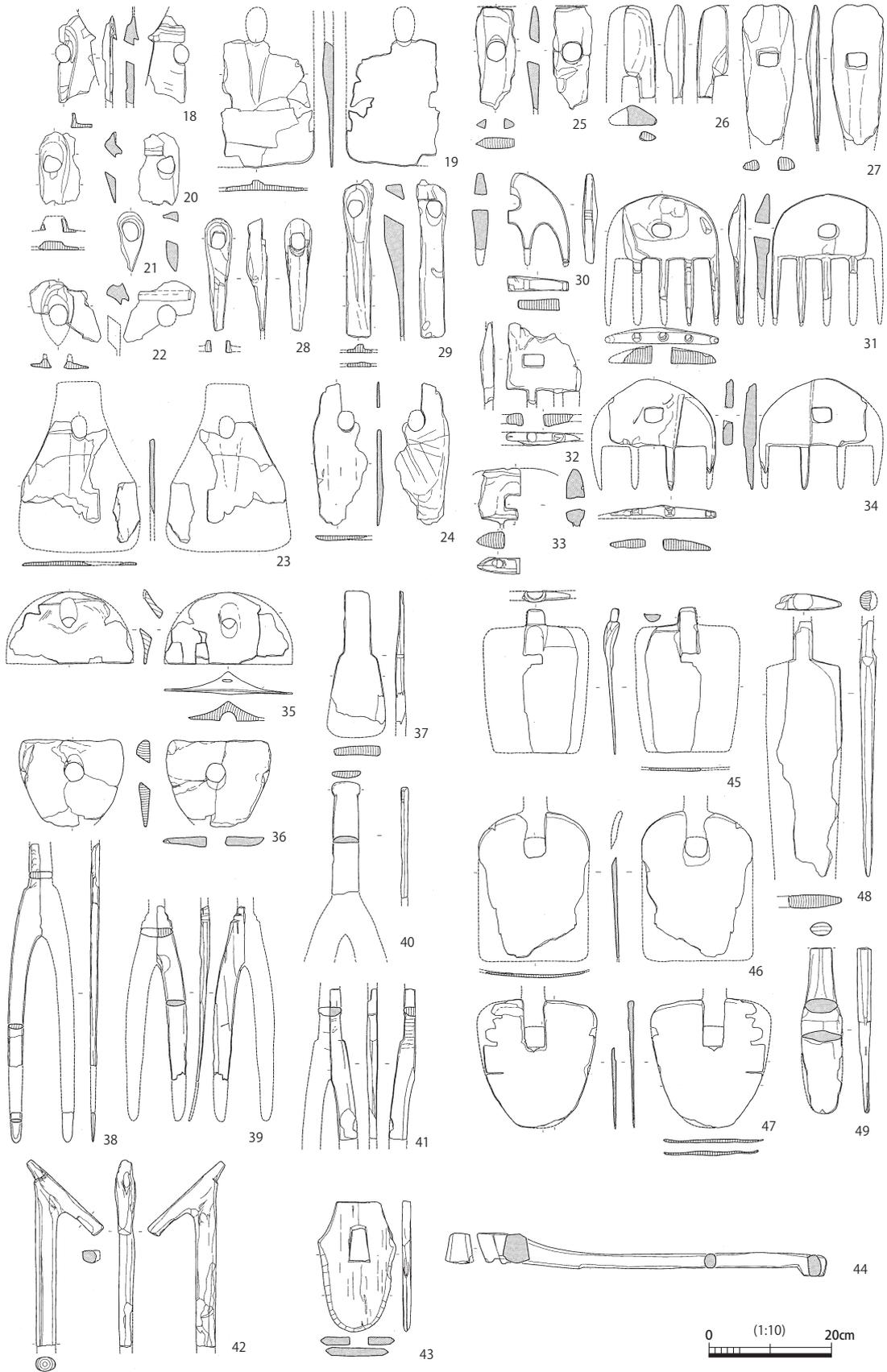


図 14 東土川遺跡・長岡京跡

肥厚する。24・25は円形柄孔，26・27は方形柄孔をもつ。28・29は長逆滴形の柄孔隆起をもつ狭鋤3 a式で，18のような近畿型鋤3式を再加工したものと推測される。

30～34は直柄多又鋤2式である。32・31は5本刃，他は4本刃である。柄孔形状は方形と円形が混交しており，刃数とも関連しない。柄孔隆起はなく，なだらかに肥厚させる。

35・36は泥除と報告される。35は泥除1 B式，36は他に例を見ない形状である。

37～41は曲柄鋤1式の鋤身である。37は平鋤で，紐掛かりは不明瞭である。38～41はいずれも又鋤で，肩部に明瞭な段をもつ。水垂遺跡では，この鋤の出土割合が高い。刃先まで完存するものはなく，すべて破損品である。42は，これら曲柄鋤の柄である。

45～47は差込鋤の身である。45・47はJ類，46はI類で，いずれも斜めに柄孔を設けることから，屈曲鋤となる。

48・49は一木鋤で，48はJ類，49はI

類の掘り棒である。

43と44は長岡京二条条間大路の北側溝から出土した狭鋤6式の身と柄で，両者が組み合った状態で出土した。43は台形の柄孔をもち，頭部は直状，刃先はU字形鉄刃を装着するため薄く作る。44は握部の先にグリップエンドをもつ。鋤身装着部分を肥厚させ，断面台形に整えて，43の柄孔に差し込む構造である。

### 7) 羽束師遺跡 (図15)

伏見区羽束師菱川町を中心として広がる弥生時代末～古墳時代初頭の集落遺跡である。桂川右岸に形成された沖積低地と微高地上に立地しており，長岡京跡下層遺跡のひとつである。居住域は複数あり，竪穴建物や溝，水田跡等が検出されている。木製品は，1988年に埋文研が行った京都市外環状線建設に伴う調査において出土した。J区の東端を南北に通る溝SD63内からの出土である。

50は近畿型鋤5式の広鋤で，前面に泥除装着用の蟻溝をもつ。柄孔隆起は低く，

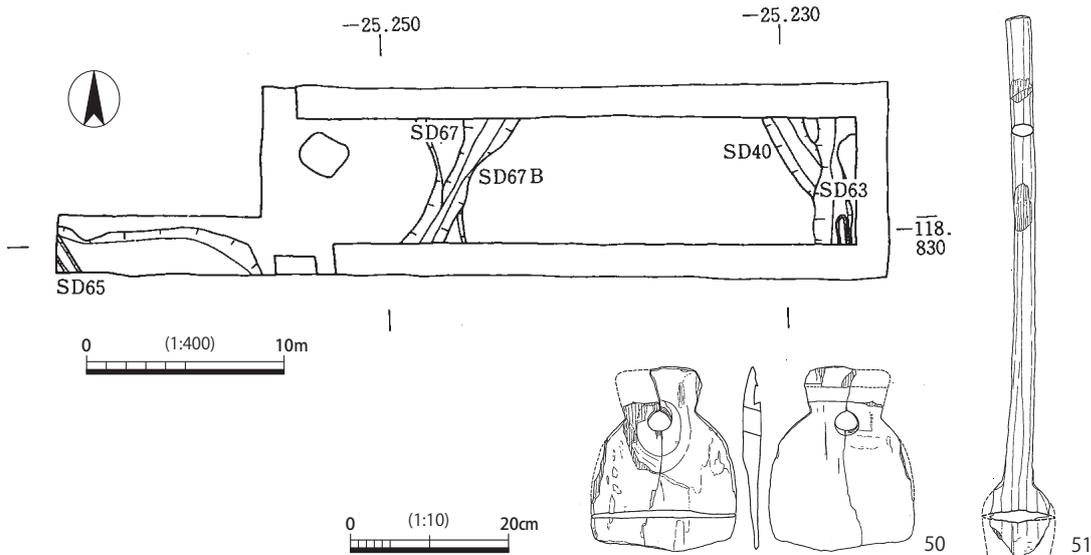


図15 羽束師遺跡

突出しない。51は一本鋤I類の掘り棒で、刃先を欠損する。

### 8) 宮ノ脇遺跡 (図16)

宮ノ脇遺跡も、長岡京下層遺跡の一つで、北には東土川遺跡、西には東土川西遺跡(向日市)が展開する。桂川の氾濫原に位置する集落遺跡であり、1983年度に行った埋文研の調査において掘立柱建物や竪穴建物、溝群が検出された。

木製品は溝内からの出土である。52は泥除1B式もしくは泥除3式の破損品で一部に補修痕が認められる。53・54は曲柄鋤2式の平鋤と又鋤である。54の最大幅は、刃の下半部にある。弥生時代後期～古墳時代初頭の製品である。

### 9) 水垂遺跡 (図17)

京阪電鉄「淀駅」の西に展開する古墳時代の集落遺跡である。桂川へ流れ込む小畑川が形成した扇状地形の末端に位置し、周辺には後背湿地が点在する。1989～1995

年に埋文研が市埋め立て処分地の拡張工事に伴い調査を実施した。その結果、古墳時代前期～後期に営まれた集落と水田が検出された。木製品は、庄内期～飛鳥時代の各時期にわたる溝および水田面より出土している。未成品は少なく、破損品が多い。

55は近畿型鋤5式である。柄の先端が差し込まれた状態で出土した。平面形状は台形に近く、柄孔隆起は楕円形を呈する。上端を折損するものの、蟻溝の下辺が鋤身に残る。水田畦畔に沿って流れる溝SD109より出土した。

56は北陸型鋤である。柄孔の左右に小孔があり、これに楔を打ち込んで泥除を固定する。居住域を流れる溝SD103より出土した。庄内期の製品である。

57は泥除2式もしくは3式の下半部で、上下辺を欠損する。板状品で柄孔付近の隆起はない。居住域の廃絶後に流入した流路SD123(5世紀末～6世紀中)より出土した。

58・59は横鋤2式の鋤身で、前者は庄

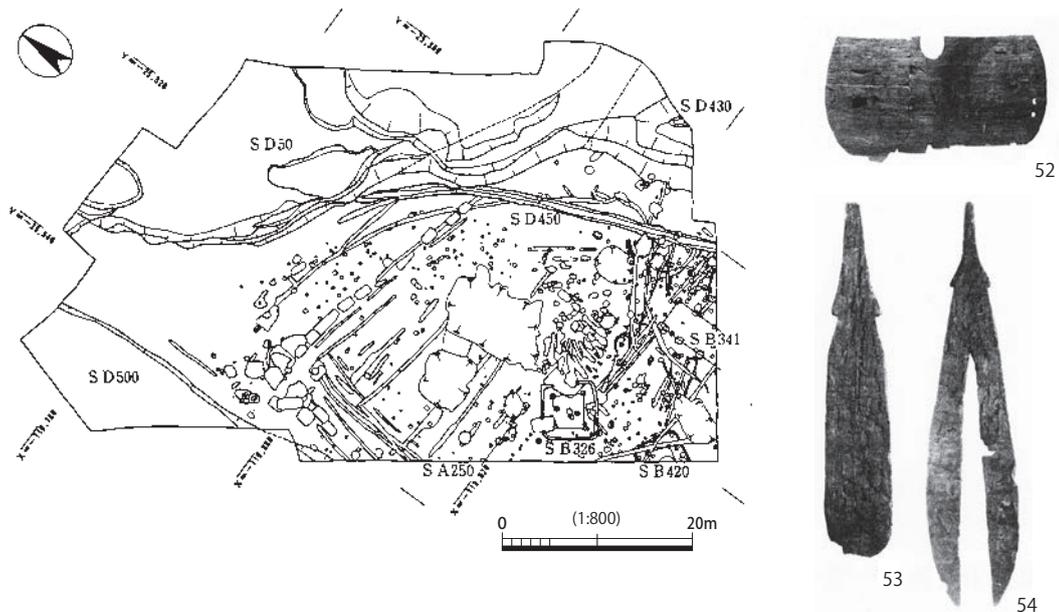


図16 宮ノ脇遺跡

内期の溝SD103から、後者は古墳時代後期の溝SD123内より出土した。

60～64は曲柄鋤2式の破損品である。

60は平鋤で、刃先と軸を欠損する。調査区東端の流路SD128（5世紀後半）より出土した。61・62は二又鋤で、62は刃を大き

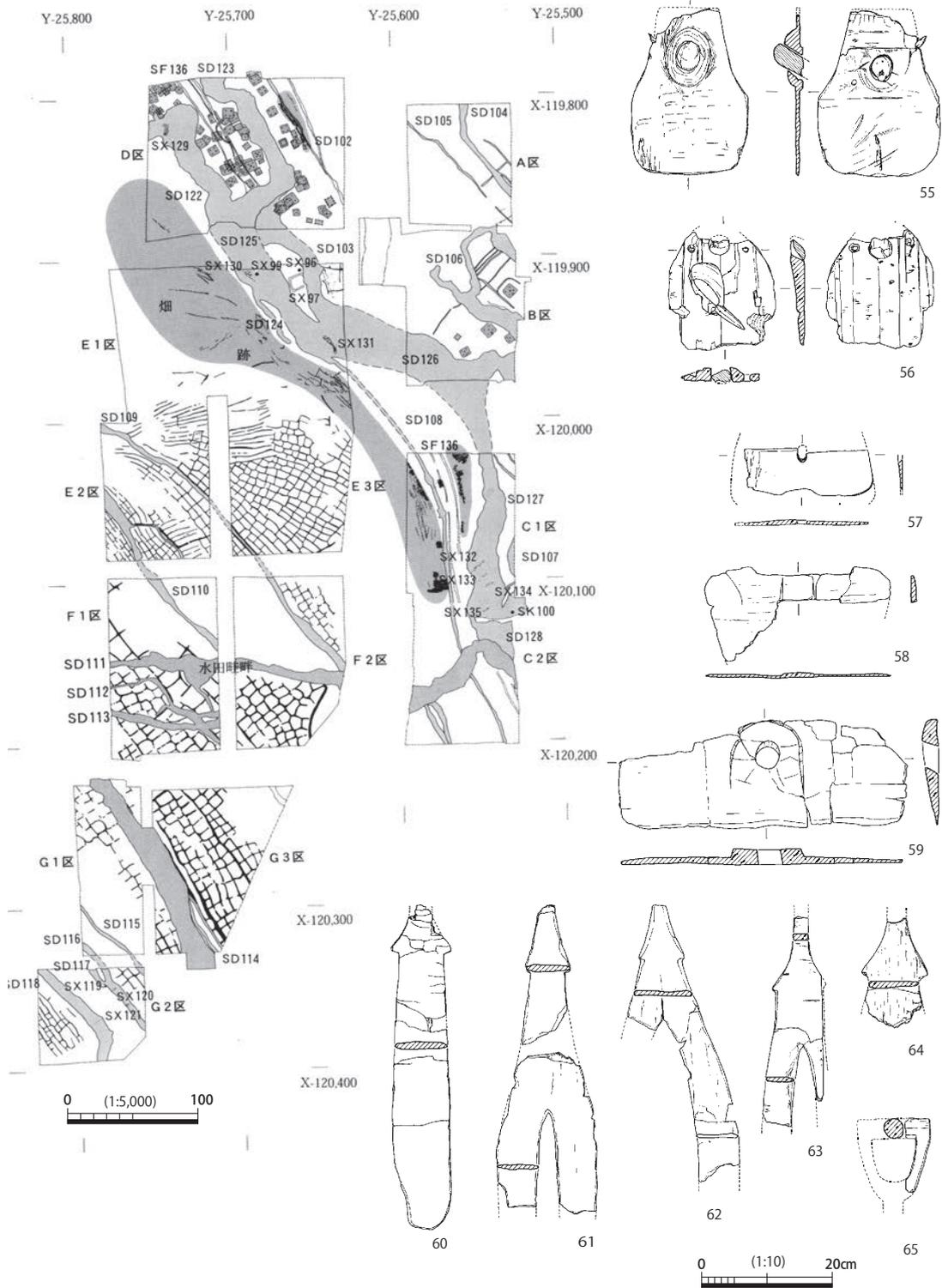


図17 水垂遺跡

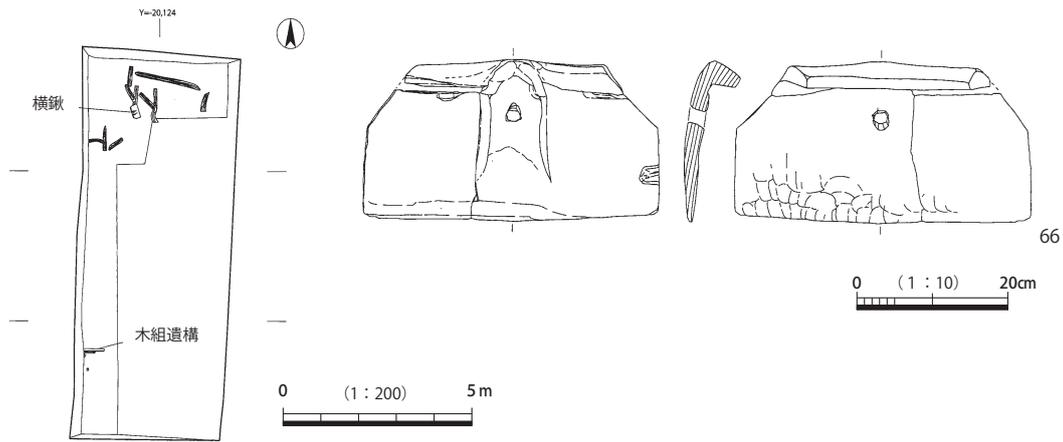


図 18 岡崎遺跡 1

く開く形状をもつ。ともにSD123（5世紀末～6世紀中）から出土した。63は同じく曲柄2式の又鋤で、水田上面からの出土である。水田の継続時期は5世紀末～6世紀前半である。64は曲柄鋤2式の笠部で又鋤または幅広の平鋤である。居住域に流入するSD122（5世紀後～6世紀前）より出土した。

65は一本鋤の握り部である。水田内を流れるSD110より出土した。

このほか、遺跡内からは、田下駄（杵型田下駄・輪櫓型田下駄）、竪杵、竪臼、鎌柄、鉄製鉄刃等の出土もある。

#### 10) 岡崎遺跡 1 (図18)

岡崎遺跡は、平安神宮や京都市美術館・動物園等の施設が集中する岡崎の地に広がる集落遺跡である。東山から鴨川に向かって傾斜する地形の変化点に相当する。院政期に建立された六勝寺の下層遺跡として知られている。

2015年度に京都市文化財保護課が二条通に面した区画において調査を行った調査では、六勝寺のひとつである尊勝寺期の遺構面が確認されたが、その整地層を断ち

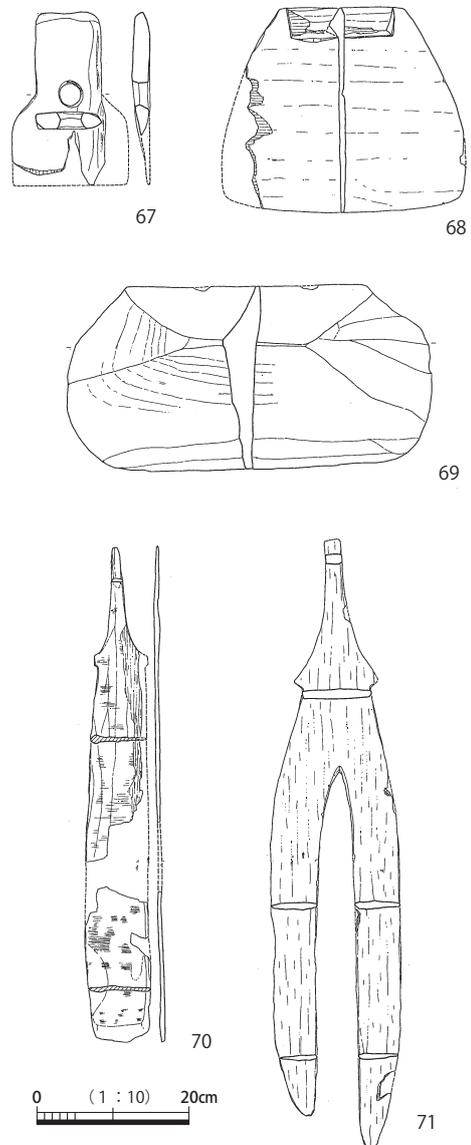


図 19 岡崎遺跡 2

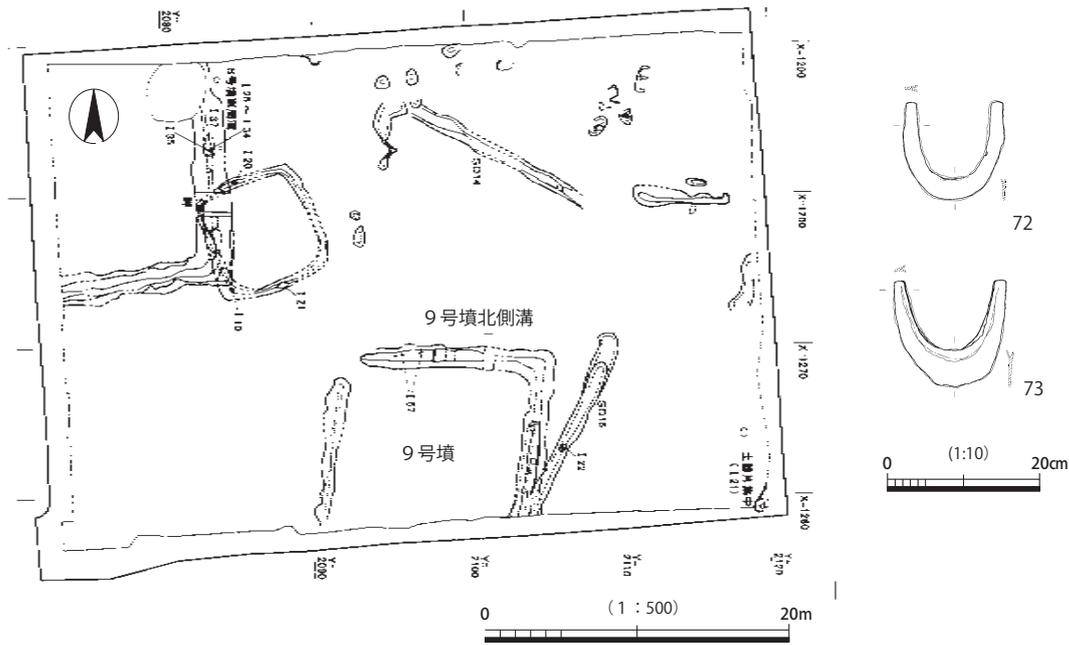


図 20 吉田二本松町遺跡

割った際に木製品が出土した。

66は横鋤の鋤身である。背面には低い柄孔隆起、前面には泥除装着用の突起を設ける。柄孔が小さいこと、また泥除との緊縛紐を通す小孔が貫通してはいないことから未成品と推測される。

なお周辺からは未加工材のほか、杭と横木から成る木組み遺構が検出されている。

#### 11) 岡崎遺跡 2 (図 19)

調査地は、京都市動物園の北西隅である。六勝寺のひとつである法勝寺の下層に相当する。1981年度に埋文研が調査を行ったところ、平安時代後期包含層以下において古墳時代前期の流路を検出した。木製品はこの埋土からの出土している。

67は近畿型鋤 2C 式である。凸形の平面形状をもつ板状品で、刃幅は 16cm 程度に復元できる。68は泥除 3 式の未成品である。隆起を持たない板状品で、上辺に蟻ほぞを設ける。69は泥除 2 A 式の未成品である。

70・71は曲柄鋤 2 式の平鋤と又鋤である。70は幅狭で、最大刃幅は 7cm である。このほか、遺構内からは豎臼が出土した。

#### 12) 吉田二本松町遺跡 (図 20)

京都大学吉田構内を含む広範囲に広がる複合遺跡である。調査地 (A N 21 区) は構内の南西部で、白川が形成する扇状地の西縁部に相当する。

2011 年度に京都大学文化財総合研究センターが調査を実施した結果、弥生時代～古墳時代の遺構面において方墳 2 基を検出した。このうち、一辺 13m を図る 9 号墳の北周溝から鉄製 U 字形刃先が 2 点出土した。72・73 とともに断面形状は V 字ないし Y 字形である。73 は左右非対称で、側縁に使い減りがみられる。完形の須恵器が伴することから、祭祀や儀礼的な意味合いをもつ埋納であると考えられる。報告文は刃先のみではなく、身が装着された状態で埋納された可能性を示す。

## (2) 鋤鋤類の編年試案

以上、京都市内の出土状況について記述した。これに基づいて作成した編年案が図21である(番号は、図8～20に示したものと同一)。以下、京都市の出土傾向について、近隣市町からの出土事例を援用しながらまとめておきたい。

### 1) 弥生時代前期新段階

京都市内からの出土例は未確認だが、水垂遺跡に隣接する雲宮遺跡(長岡京市)からは、両刃鋤1式、近畿型鋤1A式、直柄多又鋤2式の出土が報告されている。これらは当該時期における農耕具のセットであり、耕作に伴う道具がすでに揃っていたことを示す(後述)。

また未成品の出土から、集落内で木製品が生産されていたことが確認される。

### 2) 弥生時代中期初頭

広鋤は深草遺跡の近畿型鋤1B式と、烏丸綾小路遺跡の近畿型鋤3A式がある。装着する泥除は1B式であり、近畿型鋤1B式と近畿型鋤3式と組み合わせることが想定されるため〔黒須2017〕、組成として矛盾しない。亀岡市太田遺跡では、近畿型鋤1B式と3A式の出土が報告されている。

17には泥除装着用の段が作り出されているが、その突出は低く目印程度である。そのため、実際の泥除装着は紐緊縛に拠るところが大きかったと推測される。

### 3) 弥生時代中期中葉～後葉

鋤鋤類の出土例が増加し、組成も充実す

る時期である。狭鋤、広鋤、泥除、直柄多又鋤、曲柄鋤、組合せ鋤、一木鋤の出土がある。

狭鋤は水垂遺跡から2b式が多く出土している。また狭鋤3a式も複数認められる。広鋤は近畿型鋤3A式を主流とする。一部で近畿型鋤2C式の出土もある。前代に比べて近畿型鋤3A式の段は突出し、鋭利となる。泥除1B式は頂部の突出が低くなる。直柄多又鋤は2式のみ出土である。曲柄鋤は平鋤・又鋤ともに1式である。組合せ鋤は差込鋤J類が多い。一木鋤はJ類とI類(堀棒)の出土がある。

### 4) 弥生時代後期～古墳時代初頭

出土器種は減少し、広鋤、泥除、横鋤、曲柄鋤、鋤となる。狭鋤、直柄多又鋤が消滅し、横鋤が新たに出現する。

広鋤は、近畿型鋤3A式が消滅し、近畿型鋤5式が主流となる。また少数ではあるが北陸型鋤の搬入が認められる。泥除の出土は確認できていないが、近畿型鋤5式に組み合う泥除3式が存在したことは予測される。また、近畿型鋤2C式の出土も一定あり、今里遺跡・今里北ノ町遺跡(ともに長岡京市)から出土が報告されている。

曲柄鋤は1式が平鋤・又鋤ともに消滅し、2式の又鋤が出現する。鶏冠井遺跡(向日市)には、2式多又鋤の出土がある。現時点では平鋤の出土は確認できていない。一木鋤はI類の出土がある。

### 5) 古墳時代前期

出土器種は、近畿型鋤2C式、泥除3式、横鋤3式、曲柄鋤2式である。近畿型鋤5

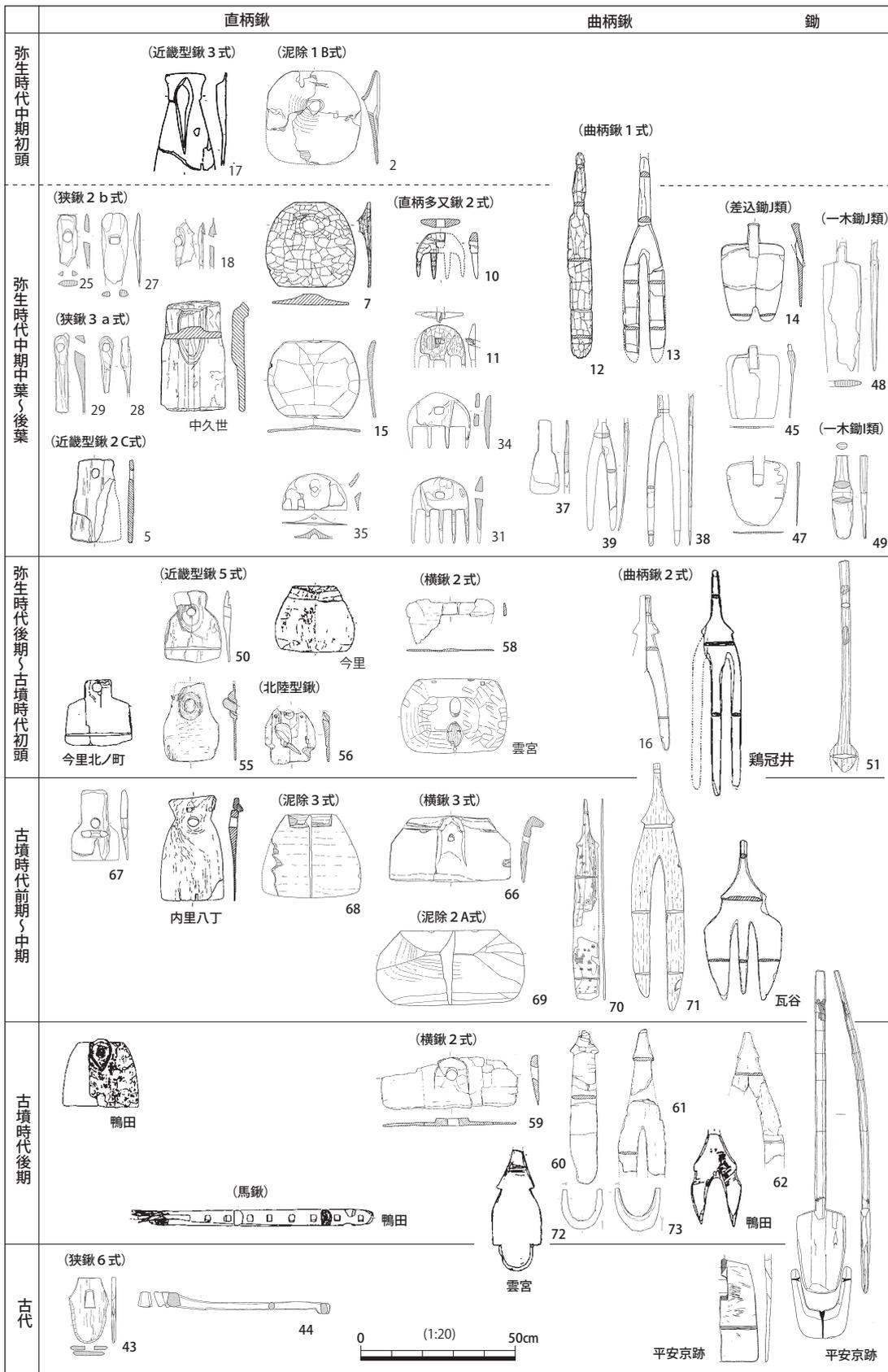


図 21 京都市内出土鋤鋤類の編年案

式は、現時点では出土例が確認できていないが、泥除3式の出土より、この時期まで存続したとみてよいだろう。内里八丁遺跡（八幡市）には泥除3式の蟻ほぞ部が差し込まれた状態で折損した近畿型鋤5式の報告がある。

曲柄鋤は、2式平鋤と2式又鋤の出土がある。平鋤は刃幅が狭く、刃長が長い。なお瓦谷遺跡（木津川市）からは、刃長が短い曲柄2式多又鋤の出土が報告されており、新相の伝播が窺える。

### 6) 古墳時代中期～後期

出土器種は、横鋤2式、曲柄鋤2式である。加えて鴨田遺跡（向日市）より、広鋤と馬鋤の出土がある。

横鋤は前代よりも刃幅が広がる傾向にある。泥除の装着は紐緊縛で、泥除2A式の存在が想定される。

曲柄鋤は前代と同じく2式平鋤、2式又鋤の出土のみであるが、鉄製U字形刃先の出土があることから、これを装着する幅広の平鋤の伝播はすでにあつたと見てよい。雲宮遺跡（長岡京市）、石本遺跡（福知山市）からは刃先にU字形の切り欠きを施した2式平鋤の出土がある。

なお、この段階では、2式又鋤の形状にバリエーションが生じている。前代に比べて刃幅間が大きく開くものや、刃長が短く先を尖らせたものが出現する。これは瀬戸内、近畿、北陸に見られる現象で、機能の特化に伴う形態分化の可能性がある。

### 7) 古代

曲柄鋤・横鋤は消滅し、直柄鋤（狭鋤6

式）のみの出土となる。

長岡京跡からは、鉄製U字形刃先を装着する狭鋤6式の出土が報告されている。続く平安京跡からは、凹字形刃先を装着した一木平鋤J類が出土している。

## 3. 鋤鋤類の伝播と定着

以上、京都市及び近隣市町の出土傾向を記述した。以下、周辺地域（地域ブロック及び旧国単位）まで視点を広げ、鋤鋤類の伝播経路とこの地域の動向に対して考察を加えたい（表1・2）。

### (1) 弥生時代前期

日本列島内でもっとも早く鋤鋤類の使用・製作が定着したのは弥生時代早期（縄文時代晩期）における北西九州ブロックである〔山口2012〕。主要器種は両刃鋤3式、狭鋤2式、直柄多又鋤1式、横又鋤、一木平鋤J類であり、これに縄文時代以来の掘り棒である一木平鋤I類が付随する。このセットは大きくは拡散せず、東九州や四国の一部など小地域的な伝播にとどまる。

前期中段階になると、両刃鋤1式が出現し、両刃鋤2式、狭鋤2式、直柄多又鋤1式、横又鋤、一木鋤J類とともに東九州・山口ブロックから山陰ブロック、瀬戸内・四国ブロックへと伝播する（図23）。瀬戸内海沿岸部では、泥除を装着する近畿型鋤1式が出現し、両刃鋤2式に置き換わる。また、横又鋤ではなく前代に受容した両刃鋤3式を横鋤として使用する。このほか、直柄多又鋤2式が組成に加わる。



表2 曲柄鋤・鋤の出土例 (○は出土例があるもの、・は出土が想定されるもの、■は鉄刃装着が想定されるもの)

時期区分	器種	曲柄鋤							緊縛鋤		差込鋤							一木鋤							刈払具	馬鋤・犁		
		ブロック	1式平	1式又	1式多	2式平	2式又	2式多	3式平	3式又	1式	2式	平I類	平J類	平K類	又J類	又I類	多J類	平H類	平T類	平I類	平J類	平K類	又J類			多I類	多J類
弥生時代前期新段階	山陰													○														
	瀬戸内・四国												○	○							○							
	河内・和泉									○				○					○			○						
	大和																	○			○							
	摂津・淡路																											
	山城・丹波																											
	近江 北陸																											
弥生時代中期初頭	山陰		○											○							○							
	瀬戸内・四国	○	○											○			○				○		○					
	河内・和泉	○	○		○					○				○								○						
	大和																					○						
	摂津・淡路									○				○														
	山城・丹波	○	○											○														
	近江 北陸									○	○								○		○	○						
弥生時代中期中葉～後葉	山陰					○	○	○						○							○	○						
	瀬戸内・四国	○	○		○		○							○							○	○		○				
	河内・和泉	○	○		○					○			○								○	○				○		
	大和													○								○						
	摂津・淡路			○										○	○													
	山城・丹波	○	○																		○	○						
	近江 北陸										○			○														
弥生時代後期～古墳時代初頭	山陰					○	○	○						○	■	○					○							
	瀬戸内・四国					○	■	○						■	■						○	○						
	河内・和泉	○		○	○	○								○							○	■					○	
	大和					○								○								○						
	摂津・淡路					■		○						○								○						
	山城・丹波							○	○												○	○						
	近江 北陸	○	○			○								○								○						
古墳時代前期～中期	山陰																				○							
	瀬戸内・四国		○		■	■	○														○							
	河内・和泉					■	○															■					○	○
	大和	○				○	○							○	○							○						
	摂津・淡路					○	○															○						
	山城・丹波					○		○	○												○	○		○				
	近江 北陸	○	○			■	○				○			○							○							
古墳時代後期	山陰					■		○													■					○		
	瀬戸内・四国					■			■	○	○	○									○							
	河内・和泉					■	■	○		■	■									■					○			○
	大和					■		○					○	○								■						
	摂津・淡路																											
	山城・丹波	○				■		○						○								■						○
	近江 北陸					■	■		○	○	○									○		○						
古代	山陰																				■							
	瀬戸内・四国																											■
	河内・和泉												○								■							○
	大和																			○		■						○
	摂津・淡路																					■						○
	山城・丹波													○														■
近江 北陸																												

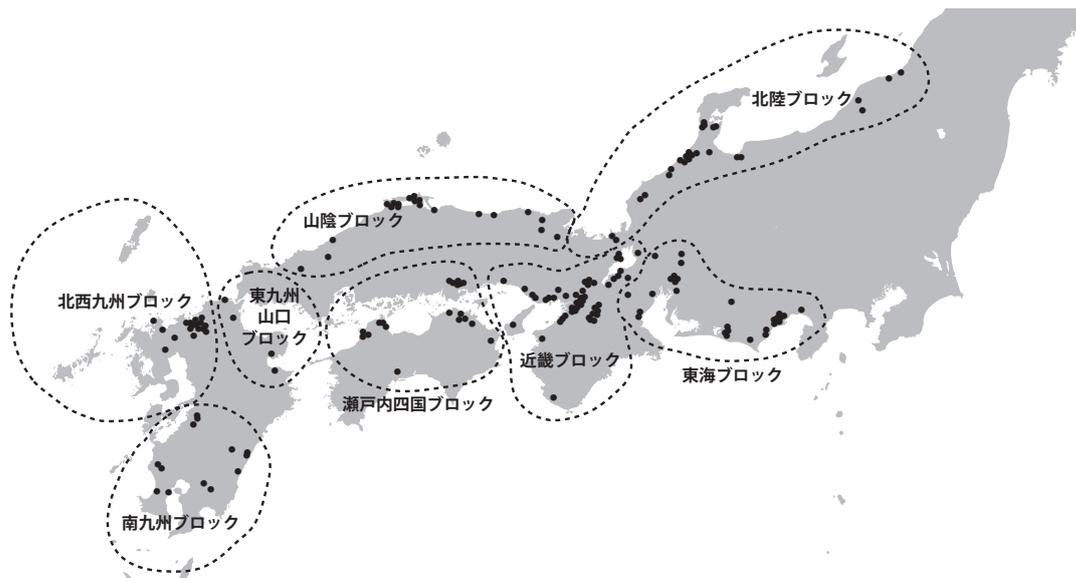


図 22 地域ブロック概念図

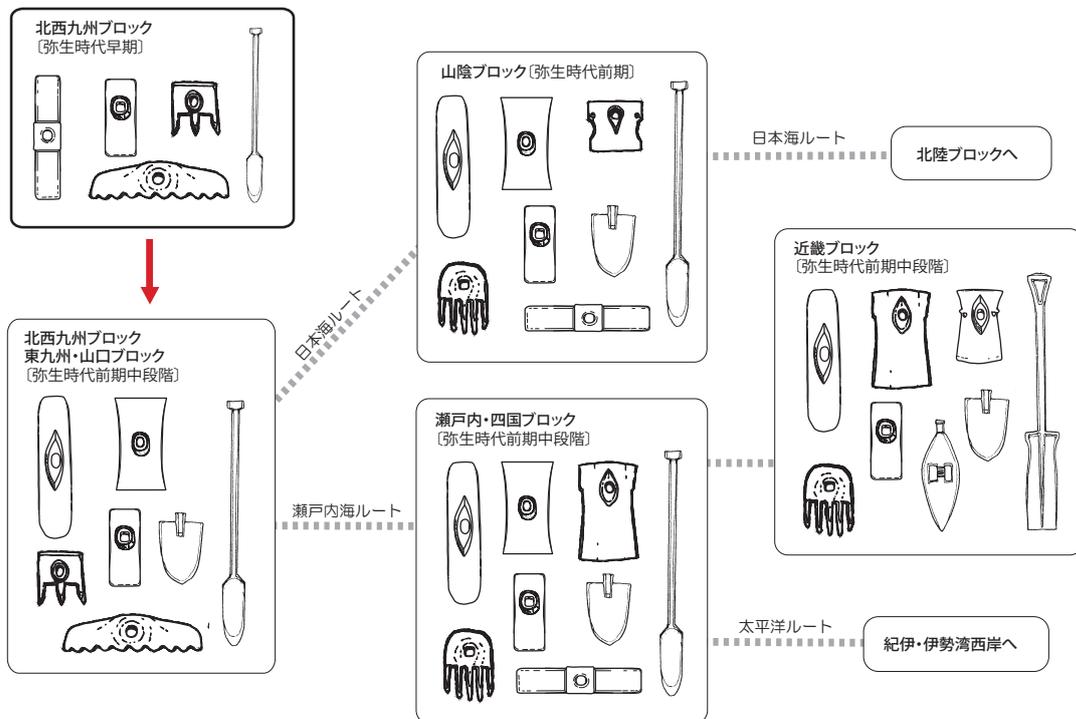


図 23 弥生時代前期における鋤鋤類セットの伝播

やがて、これらの情報が近畿ブロックへ及び、さらに瀬戸内から紀州灘を経て伊勢湾西岸へもたらされる。

近畿ブロックでは、このセットに緊縛鋤1式、一木平鋤H類等が加わる。また近畿型鋤1式をベースとして1 A式が生み出される〔黒須2009〕。横鋤は受容されず、欠

落したまま近畿以東へ拡散しており、雲宮遺跡へ到達したのもこのセットであると考えられる。

前期新段階になると、近畿型鋤1 A式とは別に派生した1 B式が摂津地域の広鋤の主流となる。また破損した1 B式を主材料とする狭鋤3 b式の出土が、連動して増加

する。

## (2) 弥生時代中期初頭

各地域で器形のバリエーションが広がり、地域色が表れる時代である。山陰ブロックでは前代に出現した山陰型鋤が隆盛し、北陸ブロックでも定着する。北陸ブロックと山陰ブロックの連携は緊密で、瀬戸内ルートでは消滅した両刃鋤2式も北陸へ伝播している。両者の中間点にあたる丹後地域ではいまだ出土例がなく、様相は不明である。

山城・丹波は摂津と連動し、近畿型鋤1B式と3A式の使用が主体となる。ただし前代の影響も残っており、出土する3A式の平面形状は、胴部がシェイプされているのに加え、柄孔隆起が舟形を呈する等、前代の近畿型鋤1A式に酷似している。

河内・摂津・山城・丹波では、曲柄鋤1式が出現し、両刃鋤1式に代わる打ち鋤として機能する。近江・大和はこの流れにやや遅れる。

## (3) 弥生時代中期中葉～後葉

前代に続き、山城・丹波は摂津・河内と同調する。ただし、河内で発生した近畿型鋤4式の受容はなく、3式のみが使用が続く。近畿型鋤4式は近江に僅かに出土例があり、以東の東海ブロックで一定の出土量があることから、河内→大和→近江→東海という伝播経路が想起される。

なお、この段階で瀬戸内ブロックでは曲柄鋤2式が出現し、河内では鋤と泥除の装着に蟻技法が試されるなど、次代におこる変化の兆しがある。

## (4) 弥生時代後期～古墳時代初頭

近畿ブロックを中心として器種構成が大きく変化する時代である。また、曲柄鋤と鋤の先端に鉄製板状刃先を装着するものが現れる。

河内・摂津では曲柄鋤2式が出現し、曲柄鋤1式が激減する。広鋤は蟻溝をもつ近畿型鋤5式が主流となり、これ以外は消滅する。平面台形を呈した狭鋤2C式は凸形に変化し、広鋤との形態差が明確となる。

さらに、これまで近畿ブロックでは受容されてこなかった横又鋤が広く使用され始める。このため、近畿ブロックにおける基本組成は、狭鋤2式、近畿型鋤2C式、近畿型鋤5式、横又鋤、曲柄2式、差込平鋤J類、一木平鋤I類・J類となり、山城・丹波も例に漏れない。ただし、この段階で、北陸型鋤の出土が認められることから、その経由地と見られる近江を介した北陸ブロックとの交流が伺える。

なお曲柄鋤2式は、多くの地域において平鋤よりも又鋤の受容が先行する。直柄多又鋤がこの段階で消滅することから、その機能を引き継ぐことが予想される。

## (5) 古墳時代前期～中期

近畿ブロックのうち河内・摂津では、近畿型鋤5式が消滅し、広鋤は2C式のみ出土となる。一方、大和、近江、山城・丹波では近畿型鋤5式は未だ主流の器種であり、出土数は多い。ブロック内でも地域により先取性に差が生じる時代と言える。この段階では、山城・丹波は近江や大和との同調性が高い。この時期の近江は北陸ブロックとの交流が密であると見られ、北陸

型鋤のほか、日本海ルートを北上した北九州型鋤も、近江経由で近畿へもたらされている。

このほか、近畿ブロックでは鉄製U字形刃先の供給により、曲柄平鋤2式の出土数が増加する。一方、北西九州ブロックでは、狭鋤6式の祖形が出現しており、曲柄鋤から直柄鋤への再転換が生じている。

#### (6) 古墳時代後期

鉄製U字形刃先が汎用品となる時代である。

近畿ブロックでは、曲柄鋤2式平鋤及びスリットタイプの出土量が激増し、新たに曲柄鋤3式が出現する。曲柄鋤3式は、従来の紐緊縛に加えてほぞ結合を行う形態で、鉄製刃先の装着により重量が増加した鋤身と柄を強固に固定するために生み出された器種であろう。

このほか一木鋤J類にもU字形刃先を装着する例が増加する。ただし、掬う機能がある差込平鋤J類は、命脈を保つ。

河内地域に先取性があった馬鋤の使用は、山城・近江地域ではこの段階から始まる。前代に引き続き、山城・丹波地域は大和地域、近江地域と親和性が高い傾向にあると言える。

なお北西九州で出現した狭鋤6式は、この段階で四国・瀬戸内ブロックに波及している。

#### (7) 古代

鋤及び鋤の先端に鉄製U字形刃先を装着することが一般的となる時代である。近畿ブロックは、大和・山城が政治の主体とな

り、周辺はその影響を大きく受ける。

鋤鋤類の出土数は減少するが、狭鋤5式、狭鋤6式、一木平鋤J類が主要器種となる。いずれも鉄製U字形（もしくは凹字形）刃先を装着する。長岡京跡の道路側溝内からは狭鋤6式が出土しており、使用時期を限定できる資料として有用である。

また、これまで直状であった一木鋤の柄は緩く湾曲し、土を掬うのに適した形態へと変化する。これに伴い、差込鋤は減少し、やがて消滅する。

鉄製刃先の導入とこれに伴う木製品の形態変化が及び器種組成の転換が如実にわかる例である。

#### おわりに

以上、本稿では弥生時代から古代における出土木製品のうち、鋤鋤類について、京都市内を含む山城・丹波地域の出土状況を中心として記述した。令和元年度に実施した『第26回京都府埋蔵文化財研究集会』「京都府内における木製農耕具」において扱った情報を多分に盛り込む内容ではあるが、これに他地域の情報を加えることで、山城・丹波地域の動向を明文化することができたと考える。

本稿では、山城・丹波地域の動向が近畿ブロック内においても極めて調和的であったこと、また、ブロック内においても、旧国単位で異なる動向があることを示した。また、他地域への伝播が一様ではなく、鋤鋤類の形状変化とともに組成の変化があったことを整理した。その要因のひとつに鉄製刃先の導入を掲げたが、地域間の差

異については水田の立地や形態、稲作技術の違いについても考慮する必要があるだろう。鋤鋤類だけでなく、他の農耕具との関連も含めて今後の課題としたい。

なお、本稿のベースとなった『第26回 京都府埋蔵文化財研究集会』において、筆者の無理な要望にもかかわらず各地域の発表を引き受けていただいた皆様、また会事務局の責を担われた中島皆夫氏（(公財)長岡京市埋蔵文化財センター）に、文末ながら深謝いたします。

黒須 亜希子（文化財保護課 文化財保護技師（埋蔵文化財担当））

## 註

- 1) 従来「諸手鋤」とも呼ばれたが、『木器集成』は意味が通じないとして「狭鋤Ⅰ式」の名称を付す。本稿では上下に刃がある鋤の意味で「両刃鋤」と呼称する。なお両刃鋤のうち平面撥形を呈する2式は刃幅が広く、狭鋤（≒打ち鋤）ではない。
- 2) 鋤の平面形状は、破損や使い減りにより、方形から台形、三角形へ変化することもあるため、本稿では、泥除装着の形態を根拠として分類した。〔黒須2017〕。
- 3) 石川県八日市地方遺跡の出土品には、木の葉形木製品の中央に柄を緊縛し、鋤状としたものがあるため、ここでは鋤として分類した。ただし、曲柄を装着して曲柄鋤とすることも可能である。汎用的な器種である可能性がある〔川口2008〕。

## 引用文献

- 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所、『中久世遺跡発掘調査概報』、京都市文化観光局、1987年。
- 京都市文化市民局、『京都市内遺跡発掘調査報告』平成27年度、2016年。
- 京都府教育委員会、『埋蔵文化財発掘調査概報』1967年。
- 辻 裕司、「第三章 木製品」角田文衛 総監修『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所、1994年。
- 中谷正和、「京都市内の地価に眠る弥生人の『足跡』」第308回京都市考古資料館文化財講座／京都アスニー京都学講座レジュメ、2019年。
- 京都大学文化総合研究センター、「第2章 京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2013年度、2015年。
- 京都大学文化総合研究センター、「第3章 京都大学吉田南構内AP23区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2015年度、2017年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所、「V長岡京跡 49 左京四条二坊・三坊・四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』昭和56年度、1983年a。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所、「38法勝寺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』昭和56年度、1983年b。

- 鳥羽遺跡・鳥羽離宮跡：(財)京都市埋蔵文化財研究所、『増補改編 鳥羽離宮跡』,1984年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「17 右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度,1985年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「11 平安京右京二条三坊1」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 1988年a。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「17 平安京右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度,1988年b。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「22 平安京右京六条一坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度,1991年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「VI長岡京跡 37 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和63年度,1993年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊,1998年。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所,「54 中久世遺跡2」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』,2011年。
- 太田遺跡：『京都府遺跡調査報告書』第6冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986
- 石本遺跡：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター,『京都府遺跡調査報告書』第8冊 1987年。
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター,『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第28冊,2000年。
- (財)古代学協会,『平安京左京五条三坊八町』平安京跡研究調査報告第19輯,1997年。
- (財)古代学協会,『平安京右京六条三坊』平安京研究調査報告第20輯,2004年。
- 同志社大学歴史資料館,『相国寺旧境内発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集,2015年。
- 奈良国立文化財研究所 『史料第二七冊 木器集成図録 古代編』,1985年。
- 奈良国立文化財研究所 『史料第三六冊 木器集成図録 近畿原始編』,1993年。

## 参考文献

- 青島 啓 「弥生～古墳時代の木製農耕具について」,『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論集』,近藤喬一先生退官記念事業会,2003年。
- 石川ゆずは 「東日本の農耕具 北陸」,『季刊考古学』第104号,雄山閣,2008年。
- 今城塚古代歴史館 『三島弥生文化の黎明 一安満遺跡の探求一』平成25年春季特別展示図録,今城塚古代歴史館,2017年。
- 川口雅之「西日本の農耕具 南部九州」,『季刊考古学』第104号,雄山閣,2008年。
- 扇崎 由「西日本の農耕具 瀬戸内・四国」,『季刊考古学』第104号,雄山閣,2008年。
- 大阪府立弥生文化博物館 『穂落とし神の足跡～農具でひもとく打弥生社会～』平成24年度夏季特別展示図録,2012年。
- 金子裕之「調査研究彙報 「エブリ」型農具の再検討」,『奈良国立文化財研究所年報 1987』,奈良国立文化財研究所,1988年。
- 黒崎 直「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」,『考古学研究』16-3,考古学研究会,1970年。
- 黒崎 直「くわとすき」,『弥生文化の研究5 道具と技術I』,雄山閣,1985年。
- 黒崎 直「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開～資料集～』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会,1988年。
- 黒崎 直「古代の農具」,『日本の美術2』No.357,至文堂,1996年。
- 黒須亜希子 「西日本の農耕具 近畿」,『季刊考古学』第104号,雄山閣,2008年。
- 黒須亜希子 「木製直柄鋤に関する覚書～山陰型広鋤・近畿型広鋤の変遷と特徴～」,『古代学研究』183号,古代学協会,2009年。
- 黒須亜希子 「弥生時代前期における瓜生堂遺跡の一様相」,『大阪文化財研究』第41号,(公財)大阪府文化財センター,2012年。
- 黒須亜希子 「木製泥除の再検討—弥生時代・古墳時代の出土事例を中心として—」,『日本考古学』第43号,日本考古学協会,吉川弘文館,2017年。

- 小林 正 「東日本の農耕具 北関東・中部高地」, 『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 佐藤浩司 「西日本の農耕具 北部・東部九州」, 『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 静岡市立登呂博物館 『特別展 —土に生きる— 静岡の鋤』, 1983年。
- 田崎博之 「韓国青銅器時代における木製農具の特性—日本列島性南西部地域の縄文時代晩期～弥生時代前期との比較を通じて—」, 高倉洋彰 編『東アジア古文化論攷』, 中国書店, 2014年。
- 都出比呂志 「農具鉄器化の二つの画期」, 『考古学研究』13-3号, 考古学研究会, 1967年。
- 中川 寧 「山陰における木製起耕具の変遷～弥生・古墳時代について～」, 『考古学ジャーナル4』No.486, ニュー・サイエンス社, 2002年。
- 中川律子 「東日本の農耕具 東海」, 『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 中原 計 「木製品における弥生時代前期の画期～広鋤I式の製作工程の変化を中心に～」, 『待兼山論叢』第37号, 大阪大学大学院文学研究科, 2003年。
- 樋上 昇 「木製農具の地域色とその変遷 —勝川遺跡出土史料を中心として—」, 『年報昭和63年度』, (財)愛知県埋蔵文化財センター, 1989年。
- 樋上 昇 「木製農具の研究略史と鋤の伝播経路」, 『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 樋上 昇 「木製農具と耕作の技術」, 『弥生時代の考古学6 弥生社会のハードウェア』, 同成社, 2009年。
- 樋上 昇 「鋤の機能に関する基礎的研究」, 『木製品から考える地域社会～弥生から古墳へ～』, 雄山閣, 2010年。
- 樋上 昇 「農具と農業生産」, 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆 編, 『古墳時代の考古学5 時代を支えた生産と技術』, 同成社, 2012年。
- 樋上 昇ほか 『季刊考古学』第104号, 雄山閣, 2008年。
- 正岡大実 「弥生時代木製品生産の一画期—直柄平鋤に付随する泥除への変遷を中心に—」, 『弥生文化博物館研究報告』第7集, 大阪府立弥生文化博物館, 2014年。
- 町田 章 「木器の製作と役割」, 『日本考古学を学ぶ(2) 原始古代の生産と生活』, 有斐閣, 1979年。
- 町田 章 「SD6030出土木製品の検討」, 『平城宮発掘調査報告X 古墳時代I』, 奈良国立文化財研究所学報 第39冊, 1981年。
- 町田 章 「木器の生産」, 『弥生文化の研究』5, 雄山閣, 1985年。
- 三浦あずさ 「唐津市梅白遺跡の木製農耕具から」, 『考古学ジャーナル4』No.486, ニュー・サイエンス社, 2002年。
- 望月由佳子 「静岡県出土の木製品の概観と課題」, 『(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 設立20周年記念論文集』, (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 2004年。
- 山口讓治 「弥生時代の木製農具—韓国新昌洞遺跡出土農具から—」, 『韓国古代文化の変遷と交渉』, 伊世英教授停年記念論叢刊行委員会, 2012年。
- 山田昌久 「弥生時代木製品生産の一画期—直柄平鋤に付随する泥除への変遷を中心に—」, 『弥生文化博物館研究報告』第7集, 大阪府立弥生文化博物館, 2014年。

